

特13-250



1200500779017



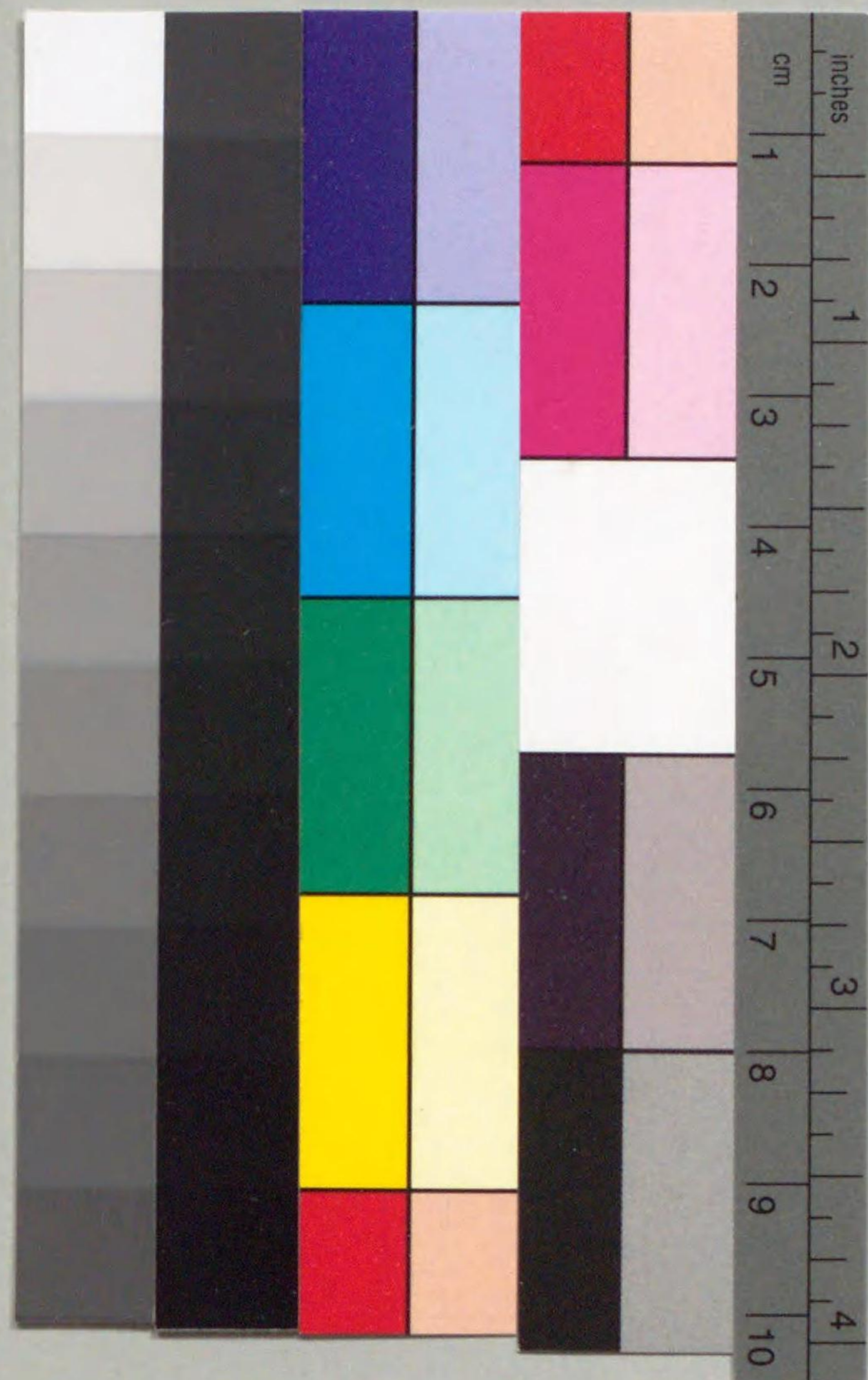
少女思出の記

休賞佳水美



264

764



inches 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10  
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10



特|3  
250



思出の記

竹貫佳水著  
博文館刊行





村の花



筆氏郎三田太



ゆくりなくも根を引きわけられて此所の谷間、彼所の淵邊  
に、幾年か雨に打たれ、日に晒らされ、時には忌はしき蟲に食  
まれんとし、むくつけき獸に踏まれんとして、尙且つその色  
失はず、その香を消しあへぬ、あはれこの一本の小百合よ！  
世の梅を説き、菊を稱へ、蘭に、水仙に、その清節を偲ぶ輩も、一  
たび汝が前に立たば、誰かその色を賞し香を愛せざらんやと、  
立よりてさし覗けば、汝は嬌羞の頭を垂れて、更に床しさを増  
すぞ床しき。

百合の香や花は千艸に陰れても

明治辛亥の春

小波題





少女思出の記 目次

(一) 憐れな雛鳥……………一

(二) 親切な小母さん……………八

(三) 大好きな安雄さん……………一六

(四) 祖母様の御病氣……………二四

(五) 泣蟲の従弟……………三〇

(六) 叔母の毒舌……………三七

(七) 温かい家庭……………四四

(八) 記念の指環……………五〇

(九) 亡き父の墓……………五五

(一〇) あゝ棄兒……………六二





目次終

(二七)	光る破屋 <small>ひかるあばらや</small>	一七七
(二六)	見事な櫻花 <small>みごとさくら</small>	一六九
(二五)	姉と妹 <small>あねいもうと</small>	一六四
(二四)	めぐりあひ	一五七
(二三)	先生のお伽噺 <small>せんせいのおとぎばなし</small>	一四三
附 録		
(上)	三人姉妹 <small>さんにんけうだい</small>	一八七
(下)	兄おもひ <small>あに</small>	一九四



(一一)	夢の夢 <small>ゆめのゆめ</small>	六八
(一二)	朧な約束 <small>おぼろやくそく</small>	七四
(一三)	今は我が身 <small>いまわがみ</small>	八〇
(一四)	東京から <small>とうきょうから</small>	八五
(一五)	問合せの手紙 <small>とひあはてがみ</small>	九〇
(一六)	別れの前日 <small>わかれぜんじつ</small>	九五
(一七)	學校友達 <small>がくかうともだち</small>	一〇三
(一八)	振れる帽子 <small>ふるぼうし</small>	一一〇
(一九)	華族の少女 <small>くわぞくせうじよ</small>	一一七
(二〇)	急なお使者 <small>きよなおつかひ</small>	一二四
(二一)	見習看護婦 <small>みならひかんごふ</small>	一三一
(二二)	可愛い孫娘 <small>かあひまごむすめ</small>	一三七





あ は れ な り 鳥

少女思出の記

(一) 憐れな雛鳥

その頃の私は、何に比えたらば可いでせう？ 巢を失つた憐れな雛鳥――  
―それではまだ雛鳥の方が、餘程羨ましくございます。

雛鳥には、廣い野原や、青々と繁つた草や樹があります、私には  
便りになるものも何にも無い！ 折角芽を出しかけた幸福の嫩は、大事の  
く祖母様のお生命と一所に、陰府の風に當つて枯れて了つたのです。  
何と云ふ情無い運命でございませう。

竹貫 佳水





私は其の時のことからお話いたします。

鶏卵の殻の中にも入つて了ひさうな私の果敢ない一生を通して、離れ難ない、忘れることの出来ないのは、いとしいく祖母様のことでござります。

今後何程、私の身にいろくくの女らしい薄衣が、どんなに投げかけられましても、祖母様の情深い瞳の光りほど、私の胸に響くものはありますまい。

斯様に私のお慕ひ申した祖母様は、木枯の吹き初めた其の夜から、病の床に臥せられました。——私は其の時のことが、如何しても忘れられませぬ。

其の日の夕暮は、身も心も消え入りさうな、誠に物寂しい夕暮でした。私と祖母様は、ほんの型ばかりの夕餉を済まして、仄暗い裸燈を厨房から持つて来ました。



それから、ゆつくりと、暫らくはお話などして、一日の疲勞を休めて居られました。が、やがて、小川に廻る小車の、撓ゆまぬやうに稼がなければならぬと云ふので、それく夜業に取掛りました。私がお隣家の小母さんから頼まれた安雄さんの綿入を縫ひ始めますと、祖母様は麻桶を膝元に寄せて、老の眼に眼鏡もおかけなさらず、頻りに續んで居られましたが、暫らくすると狭い襟を掻き窄めて、

『お、寒い。』

と仰有りながら、噓一つ二つ三つ。私は昨夜から氣になつて居た障子の穴——晝間貼らうと思つてツイ忘れて居た障子の穴へ、襪褌行李から襦袢の片袖を出して来て、それを纏めて押込んで、風穴を塞ぎました。

『あの穴から風が来たんだわ、少しは好くなつたでせう。』  
『左様かえ。何だか今夜はゾクゾク寒い晩ね。』



『もつと衣服を着るとい、わ。持つて来て上げませうか？』  
 私が針を置いて起たうとしますと、祖母様は微に首を振つて、

『もうい、よ。』

と仰有る。でも私は、

『私、持つて来るわ。』

と云ひながら、押入から綿の澤山入つた半纏を抱えて来て、背後から静に着せて上げると、祖母様は黙つて袖をお通しなされた。

斯様する私の心遣ひは、私に取つては天にも地にも掛け換えのない、大切の〜祖母様だからです。萬一御病氣にでもなつたら、それこそ本當に如何しやう？——私は父母のお顔も知らない、兄妹も無い、寂しい獨り法師、五歳の歳から祖母様の手一つで育てられて、暑さ寒さにも不足なく、黒髪もこれ！握りきれない程になつた……のに。

此の春、村の學校を卒業するまでは、どんなに心遣ひだつたらう。私が免狀を頂いて歸つて来た時、祖母様は嬉し泣きにお泣きなされた、其のお顔が、何時までも〜、私には忘れられませぬ。其の大切な祖母様ですから私の小さい胸に結ばれて、解け兼ねるも無理はないではありませんか。何卒、何時までもお達者でと祈つたことも、あゝ、其の夜、皆な仇となりました。

祖母様は麻桶の蓋をなされて、

『寒氣がしていけないから私は寝るよ。』

と云はれました。斯様なことはついに一度無いことですから、私は全く、物の怪に襲はれたやうに、吃驚して眼を見張りましたが、祖母様は別段變つた御様子も無く、毎夜の通り四圍を始末して、臥床にお入りなさいました。



『お頭でも揉みませうか？』  
 と、私は心配でなりませんから、搔卷を掛けながら斯様云ひますと、  
 『心配おしでない、大丈夫だから。』  
 と元氣の好いお言葉。私はそれでも氣にかゝりますから、  
 『お薬を上げませうか？』  
 とお尋ねすると、祖母様は、  
 『では實母散でも服んで見やうかね。』  
 と仰有るので、私は暗い爐側へ来て、自在鍵に鐵瓶をかけました。  
 薪が、チラ／＼と燃え立つて、煤ぼけた厨房の、隅々までバツと明るく  
 なりました。私は柱の上の方に掛つて居た富山の藥袋を取下ろし、其中  
 から一貼の實母散を探し出して、よく煎じて差上げました。  
 お薬を召上がると祖母様は、

『お前も最早お寝みな。』  
 と仰有つてくださった。私は『え、』と點頭いて御返事はしましたけれど、  
 直ぐ臥せる心にはなれませんでした。  
 いろ／＼と胸に迫つて来る悲しいことを思ひ煩ひながら元の座に還りま  
 したが、それからは針の運びも澁つて、少しも捗取りませんでした。  
 暫らくしますと、寂しい庭に草履の音！ 私は直ぐと、お隣家の安雄さ  
 んのお母さんだと知りました。振り返つて見ると、障子が細目に開いて、  
 『オヤ、祖母さんは？』  
 『寒氣がするつて寝ましたの。』  
 『寒氣がするつて……』  
 と小母さんはずつと入つてお出でなされた。





(二) 親切な小母さん

『まア珍らしいことね。』

と、安雄さんのお母さんは、不安らしい口振りで斯様にひながら、私の傍へ来てお座りなさいました。

私は此の、安雄さんのお母さんが大好きなのです。ですから何時も小母さん〜と云つて慕つて居るのです。小母さんは餘り豊かでない生活こそ爲て居ますが、心根正しく、身體を惜まず働きますので、遠い山端の桑畑へも、蔓草一本生さないと云ふ、至つてまめな人なのです。

安雄さんは、此の小母さん夫婦の一粒種、快活な男の子で、今年十歳ですが、小母さんは安雄さんに、何處々々までも學問を仕込むのだと、何時も口癖のやうに云つて居ます。小母さんの髪は何時も亂れて、顔は日に



黒々と焼けて、見るからが小作人の妻らしうございますが、私は其の情の籠められた瞳が懐かしくつて忘れられないのです。

『ほんとに如何したんだね、少し位悪いたつて寝る人ではないのにさ。』

『ですから私も心配で……。』

『困つたねえ。』

小母さんは啾く如く云つて、眉を擡めました。隣り合つて十幾年、私が多だ祖母様の萎びた乳房をソツと押さえて見て居た頃から、雨につけ風につけ、互に慰め合つて居られるが、斯様に早く伏せると云ふことは珍らしい。

病氣——もしや軽からぬ病氣、その素地ではあるまいか、と、小母さんは危ぶむ心に充たされて祖母様の臥床を覗きました。

『祖母さん、如何したね?』

『お、小母さんかい、滅多に斯様なことはないんだが、何うも起きて居



られないから、今寝たところ……。」

『それは困つたね。此の頃は陽氣が悪いからねえ。』

『大したこともあるまいが……。』

『まア大切におしなさいよ。』

『ありがたう。彼の娘にお茶でも煎させて飲んでお呉んなさい。』

私は先刻から沸してゐる白湯を注して、溢茶を勧めました。小母さんはお茶を啜りながら、母親らしい顔に暫らく打案ずる色を浮べて居ましたがやがて起ち上つて、

『どれ……それでは祖母さんを大切におしよ。』

と云ひながらお椀に出て、小さい聲で、

『優梨ちゃん、まアね、左様なことはあるまいと思ふが、夜半に萬一ひよつと、熱でも烈く出るやうだつたら直ぐ起すんだよ。』

『え……』

『可いかい、遠慮は無いから、直ぐ起しにに來てお呉れよ。左様すりや、私なり、親爺なり、來て上げるからね。』

『有難う。』

私は温い情に包まれて、いくらか心丈夫にはなりましたが、それでも小母さんが歸つて了つてからは、どうも針が濫り勝で、一向お裁縫が捗取りませんから、私も早く寝ることにし、祖母様の傍近く枕を並べましたが、いつものやうにグッスリ寝られず、ともすると厭な夢に破られました。

それから三日経つてから、村の病院のお醫者様が私の家へ來られて、祖母様の御病氣は、流行症の感冒だと分りました。風邪なら左様心配しないでも可い、まアよかつたとは思ひましたが、それでも私の胸は何故か安らかになりませんでした。



四日目の朝でした。  
私が落葉に結ぶ薄霜を踏んで、病院から薬を戴いて歸つて來ますと、障子を閉めきつて床の上で、祖母様と小母さんとで、何やら頻りに語り合つて居られます。

立聞きするのは、悪いことだと云ふこと位は、私だつて知つて居ますが其の話の節々が、何うやら私の身に振りかゝつて居るらしいので、私は朝日を受けた表椽に密と腰掛けて、蟲々と立ち並んで居る彼方の冬の森を眺めながら、耳を澄まして居ますと……小母さんの聲で、

『優梨ちゃんのこと、考へれば可哀さうになるが、それぢや私等が困つて了ふ、だから後は後として……』

『それも左様だけど……』  
これは祖母様のお聲。それから暫らくの間は何にも聞えませんでした、

又祖母様のお聲で、

『斯様して別居して居ることだつて、原因はと云へば彼の娘からぢやないか。だから私はもう、如何なことにならうとも、彼様なものゝ世話にはならないよ。』

彼様なもの？ あゝ叔父さんのことだ。私の叔父さんの家は、此の庭から真直ぐに出て、前の小さい杉の森の中を通つて、小川を渡つて、隣村から前橋街道へ出る道と同じ道に出て、利根川に添つて下ると宮田村の入口、その斷崖の上にある茅屋が、私の叔父さんの家なのだが……。

あゝ昔時は、廣い、嚴しい屋敷だつた。私の學校友達の道子さんの家と同じやうに、倉庫が三戸前も四戸前も真白く光つて居る、街道を往來する旅人の眼を驚かしたものであつたが、皆な叔父さんが善からぬことに費つて、とうとうそれも賣り拂つて了はれた。



今も、其の名残りをとめて居るのは庭の先の桑畑ばかり、其の隅の方には、祖母様がお植えなされた櫻の樹が一本ある！

私は、よくは覚えて居ないが、何でも五歳の時だつたとか云ひました。一人で其の櫻樹の下に行つて、美しく咲いた小枝を漸と手折つて喜んで居る處を、生憎と叔父さんに見つけられて、大變に叱られて、私は、荒縄でグル／＼巻きにされた上に、叔母さんは煙り立つ線香を持つて来て、泣いて謝まる私の小さな手に、大人にも點えないやうな大きなお灸を點えられたので、私は耐えられず、血でも絞られるやうに泣き喚くと、お隣家へ行つて居た祖母様は喫驚して、素足のまゝ飛んで来て、突然叔父さん叔母さんを突き除けて、急いで艾を掻き捨て、くだすつた……とのこと。

其の頃から祖母様は、私を連れて此の村——少許の隠居地がある此の村へ別居せられた……とのこと。

叔父さんや叔母さんには、私は年に一二度は屹度逢ふが、其の時は私は何時でも、光る瞳に壓せられて、二度と仰ぎ見ることは出来ない……其の叔父さん叔母さんに、私を如何しやうと云ふのでせう？

私は頻りにする胸騒ぎを、じつと押えて、鎮めて、聞耳立て、聞いて居るうち、いつか涙は眼に一杯になりました。

『其處はまた、私が始終来て巧くあやなして上げるから心配をしでないよ私が隣家に居るうちは大丈夫だよ。』

『ぢやア優梨はお前さんに任せるから、どうぞ……。』

と云つて、祖母様のお聲は掠れて止まりました。

意外のことになつたので、私は袖を喰ひ締めて立たうとした時、何時の間に来たかお隣家の安雄さんが、両手を擴げて私を驚かさうとして居ますので、私はハツと思つて、袖でもつて安雄さんの口を覆つて、力限り引張



つて、小川の堰の傍まで連れて行きました。

(三) 大好きな安雄さん

安雄さんは私の心を知る筈がありませんから、小川の堰の傍まで来ると一生懸命私の手を振り解いて、拳を固めて滅茶苦茶に私を突きました。

そして私が袖を放すと、真紅になつて怒つて、突立つて、

『馬鹿ア、口を押えれば死んで了ふぢやないか。』

『……』

『息が出来ないぢやないか、苦しいぢやないか。』

『まア苦しかつたの、御免してくださいよ、ね、ね、いゝこと。』

安雄さんは私を睨めたまゝ、黙つて、けれども不承々に點頭をしました

私は、今にも如何なるか知れない私の境涯で、安雄さんの懐しい素振り

を見ると、得知らぬ涙が溢れて、胸が一杯になりました。

何にも云はないで、私は安雄さんの衣服の塵埃を拂つて上げて、其の儘枯草の上に膝を突きました。堰り来る涙を呑んで、そつと眼を拭きますと安雄さんは不審さうな顔をして、私の顔を覗いて、

『姉さん、何だつて泣くの？ 僕が怒つたから……？ え、姉さん、僕、

そんなに怒つたつもりぢやないんだよ。』

私は、わざと微笑んで、

『可いのよ、左様ぢやないのよ。』

『祖母さんに叱られたの？』

『いゝえ。』

『ぢやア如何したの？』

『安雄さんの知らないこと。』



『僕の知らないこと……?』  
 安雄さんは清らかな瞳を、さもく驚いたやう見張つて、疑念の雲は私から離れませんでした。

私はよつほど話して了はうかとも思ひましたが、まだ確とは分らぬことを、べらくくとお喋りするのには、はしたないことだと気がつきましたから、黙つて、垂頭れて居りますと、安雄さんは承知しません。

『僕の知らないことつて、可笑しいなア。……ぢやア僕のお母さん知つて居る?』

私はハツと思ひましたが、何氣無い體で、僅に頭を振つて見せました。

何の小母さんが知らぬことがあらう! けれど私が今泣いて居たことが分れば、此の上にも御心配をかける道理……と思ふと、これから先、如何な悲しい辛いことがあつても、私一人でジツと耐えなければなるまい、女

々しく自分の將來ばかり案じ煩ふよりは、祖母様の御病氣が、一日も早く御全快になるやう。神様にお祈りするが優しであらう。祖母様さへ御壯健になれば、私の悲哀なんて綺麗に拭ひ去られて、又、今のやうに安雄さんと楽しく遊ぶことが出来る……。

叔父さん叔母さんだつて、私の親身の叔父叔母だもの、私の心の持ちやうで、可愛がつてくださらぬことはあるまい。

あ、私は忘れて居ました。

人の心の赤誠は、遂には鬼神さへ泣かせることがあると云ふ、私にも其の誠心がある以上は、叔父さん叔母さんを、慈悲深い父とも母とも思つて、孝養を盡せないことはない筈——私はそれを忘れて居ました。

誠心が叔父さんや叔母さんに通ずる間、私は雨も風も凌がなければならぬ——と思ふと、弟のやうに思つて居る安雄さんが、今更のやうに、耐え



られないほど懐しい。

『何でもないのでよ〜。私のことなどは構はないで、安雄さんは早く學校へ行かなければ遅くなるでせう。』

『あゝ……だつて僕……。』

私が離れ難なく思へば安雄さんも離れ難ない思ひをして居るらしい。

うら寒い冬の初めの朝の風が、霜に遅れた道端の柿の樹の幾葉を、ガサ／＼と揺つて吹いて來ますので、私も安雄さんも、思はず襟を窄めました。

安雄さんの家は、私達の立つて居る後方の、小さい土橋を渡ると直ぐなのです。低い杉垣の間から、西脇の荒壁が透いて見えて、庭の堆肥も眼につきます。東の方は畑續き、寂しい背景の冬の田舎！

私達は歩むともなく歩んで、安雄さん家の庭の日當りの宜い小椽へ來ました、そして二人は黙つたまゝ、庭の粗朶垣に思ふ存分蔓をはびこらして

吊された紅い烏瓜のブラ／＼するのを見入つて居ました。暫らくすると急に思ひついたやうに、安雄さんは座敷へ駆け込んで行つて、教科書の入つた麻製の鞆を取つて來て、私の傍へ投げ出しました。

『まア何んて亂暴なの。』

私は鞆を引寄せて膝の上に置くと、安雄さんは調子面白く口笛を吹きながら、座敷の中を探し始めました。何を探すのか、荒々しい音をガタピシさせるので、見兼ねて私が止めますと、安雄さんは軽く點頭いたばかりで、止めやうともしませんでした。

其處へ小母さんが歸つて來られました。小母さんは私を見ると、直ぐ傍へ寄つて來て、

『お、優梨ちゃん此處に居たのかい。椽側に藥瓶を置いてあつたから、もう歸つて居るのだとは思つたけれど、何處へ行つたのだらうと思つた』



よ。

『え、今しがた歸つて……安雄さんと此處で遊んで居たのよ。』

私は何氣なく云つて、鞆を傍に置き置きました。安雄と云ふ我が兒の名を聞くと、小母さんは愛に充ち満ちた瞳を輝かせて、座敷を覗いて、

『安雄……、安雄や……。』

呼びましたけれど、安雄さんの返事が無いので、小母さんは不審さうな顔してお椽から上らうとしますと、安雄さんは手を拍つて笑ひながら障子の影から現はれ出しました。

『やア可笑いなア、僕此處に隠れて居るのをお母さん知らないんだもの。』

『知つてたともさ、知つてるから呼んだんぢやないか。』

『うゝん、知らなかつたんだい。』

『何でも可いから、背戸の畑へ行つてお父さんと呼んでお出で。』

『何と云つて？』

安雄さんはもうお椽から下りて草履を穿きました。

『あの、お父さんに、今朝一寸宮田まで行つて来てお呉れつて。』

『宮田まで？ 何しに……？』

『優梨ちゃんのお父さんと呼びに行くんだよ。』

私は、今更のやうに此の言葉がハツと胸にこたへて、あらぬ方を眺めました。

私の、可愛い、安雄さんは、何にも知らず、背戸へ駈けて行きました。

私も此の時は、安雄さんのお使ひで悪魔の手に渡されやうとは夢にも思ひませんでした。皆な後から分つたのです。

安雄さんが行つて了ふと、小母さんは私に、宮田の叔父さんと呼び迎へることを話しました。斯様ないと、隣家の役目が濟まないで、浮世の



義理と云ふものは辛いものだ、と、泌々と語られました。

(四) 祖母様の御病氣

其の日の夕暮近くになつて、叔父さん叔母さんが見えました。私は夕食の仕度をしなければならぬので、多くは厨房の方に居ましたから、どんな話が其の間に纏つたか知りませんが、洋燈の點く頃に、叔父さんは私には何とも云はずに歸つて行かれました。叔母さんだけ後に残つて……。

私は叔父さんの太く逞ましい姿が、住み馴れた此の温い家から出て行く其の後影を見送つて、ほつとするほどでありましたが、洋燈の下で熟と私を見詰めて居る叔母さんの二つの瞳に氣がつかますと、何となく胸も狭るやうに覺えました。左様した心を躬ら求めて馴染まぬのは悪いこと、幾度か臆する心を勵ましては、叔母さんの微笑を迎へましたけれど、此の私の

心盡しは皆な無益に終りました。叔母さんの私を可愛がつてくださらぬことは、直ぐと知れました。

翌る朝、私が薬を取つて歸つて來ますと、叔母さんは、祖母様の病床近くへ行かうとする私を呼び止めて、

『優梨、お前はもう祖母さんには構はんでお呉れよ。祖母さんの世話は私がするから、お前は家の周囲の掃除でもなさい。』

『はい。』と、私は素直に返事をして、薬瓶を叔母さんに渡しました。

『お前などが子供の癖に生意氣な真似をすると、軽い病氣でも重くなつて了ふよ。此方が迷惑だから止してお呉れよ。』

これが私に對する叔母さんの最初の挨拶でした。昨日來てから長い一夜、斯様せいとも、彼様せいとも仰有らず、唐突に此の骨々しいお言葉！ 私には思はず胸が一杯になつて、眼は涙で見えなくなりました。





けれども眞實、私の——子供の馴れぬ介抱の爲めに、祖母様の御病氣が重くなつたのならば如何しやう？ 私は生きては居られない……と思ふと悲しい——黒雲のやうな念ひが、後から——湧いて出て、泣くより他はありませんでした。けれども叔母さんの前で泣いては、また叱られる種ですから、私は急いで庭へ出ました。

座敷では、叔母さんが煙管で火鉢の椽をカチ——と叩く——其の響きが又た恐ろしく私の胸を波立たせました。

あ、私は最早祖母様のお傍に居ることが出来ないのか……と思ふと、箒も何も其處へ投げ棄て、急いで祖母様の枕元へ馳けて行つて、心のまゝ、聲を限りに泣きたい！ けれどもそれさへ最早出来ない。あ、何と云ふ情無いことでせう！ 私は、心から寂しさを味ふやうになつたのは此の日からです。



私は其の夜、叔母さんがお隣家の小母さん許へ行つた留守に、此の間にと急いで祖母様の枕元へ行つて見ました。僅か一日見ないだけなのに、祖母様は際立つてお瘦せなされたやうですから、私はそつと布團の上の手を乗せて、そして軽く揺つて、

『祖母様々々々。』

と、小さい聲で呼んで見ました。私の聲が聞えたと見えて、祖母様は細い瞳を見開いて、懐かし氣に私の顔をしげくと御覽になり、顎で御返事をなさいました。

『祖母さん、氣分は如何ですの？』

『あ、少つとは好い方だよ。』

『好いの祖母さん、まア嬉しいこと、早く快くなつてくださいいよ。』  
『あ……』



『私ね祖母さん、祖母さんさへ早く癒つてくだされば、もう何にも要らな  
いわ。』

本當に私は左様思ひました、祖母様の御病氣さへ癒れば何にも要らない。  
他に如何な辛いことがあつても構はないとまで思ひました。

祖母様はじつと私の顔を御覧になつて、

『お秋は如何したえ？』

『安雄さんどこへ……。』

『左様か。』

と云つて、眼を閉ぢられました。

『叔母さんが何んなことを云つても、ハイ〜と云つてるんだよ。心さへ  
解ければ、またお前の力になつて呉れないこともあるまいからね。』

『え。』

と、私は心から點頭きました。

やがて祖母様は、少し軀を斜めに、私の手から薬を取つて召し上ると、

『お前今日は如何したの？ 終日見えなかつたぢやないか。』

『え、御掃除をして居たものですから。』

『掃除？ 今掃除なんかしなくつても可いよ、私が癒つてから一所にして  
上げるから。』

『え。』

と私は御返事はしたものの、其の以上の聲は出ませんでした。眼はまた一  
杯に濡んで來ました。

斯様して祖母様と二人で居るほど楽しいことはない、ソロモンの榮華と  
やら云ふことは、私は能くは知りませんが、それより優るとも劣ることは  
ないでせう。



私が斯様して、悲しい心を温めて居る所へ、叔母さんは歸つて來ました。そして冷かな腫で私をジロリと見て、物は一言も云はず、黙つて祖母様の枕元で、スバ／＼煙草を喫ひ始めました。

(五) 泣蟲の従弟

それから三日ばかり経つた後のこと。

祖母様の御病氣は如何も輕からぬやうだと、お醫者様が腕を拱ぬかれまして。左様云はれて見ると、昨日よりは今日は召上りものも少なく、お顔の色艶も好くなく、熱があつて、何か仰有る言葉さへ大儀さうですから、私は心配で／＼堪らないのに、叔母さんは一向平氣……らしい。

お醫者様が歸りがけに、藥鞆を閉ぢながら、小聲で注意を與えたので、叔母さんも其の時は少しは吃驚なすつたらしかつたが、と云つて別に手當

を十分に仕やうとするでもなく、たゞ、直ぐとは癒らない、長びく病氣になつたのだと思ひ込んだらしい、其の夜、叔父さんを呼びにやつて、頻りにこそ／＼相談をして居ました。

何の相談か私には解りませんでした。其の翌朝からは従弟の作太郎と云ふ、今年七歳になる少年が來ました。

作太郎は叔母さんに似て、額の廣い、鼻の低い兒で、些とも可愛らしい處はありませんが、それでも私は従弟だと思ふと、何だか懐しい氣もしますから、喜ばしてやりたいと思つて、學校時代に書いた、彩色した圖畫などを遣りましたのに、嬉しさうな顔もせず、直ぐと引裂いて了ひました。

『あら、もう破いたの。』

と、私が云ひますと、破いた圖畫などには見向きもせず、鼻水でピカ／＼光つて居る筒袖を嚙んで、ジロリ／＼と私を見て居ます。其の憎らしいこ



と、云つたら、安雄さんとは全で反對で、些とも活潑な、少年らしい處がありませぬ。けれども私は、たゞ一人の従弟だと思ひますから、出来るだけのことにはしてやる意です。

二時過ぎになりますと、安雄さんは、『函根の山は天下の險』と、大きな聲で唱歌を唱ひながら、背戸の杉林の細道から歸つて來ました。そして私の姿が厨房に見えますと、肩から掛けた學校鞆を、がた／＼揺らせながら駈けて來まして、

『姉さん、只今。』

『まア早かつたこと。』

斯様いひながら私は傍へ寄つて行くと、安雄さんはそつと座敷を覗いて、作太郎が一人つまらなさうに遊んで居るのを見て、

『やア作ちゃんが來てゐるね。』

『あゝ來て居るから遊んで頂戴ね。』

『うん、僕、今鞆を置いて來らアね。』

それから安雄さんは、家に歸つて鞆を置いて來ると、兄さんぶつて、作太郎の手を曳いて遊びに出ました。

安雄さんは何處へ何う連れ歩いて居るのですか、一時間経つても、二時間経つても歸つて來ません。私は案じるところは無いつと思ひましたが、それでも叔母さんが心配すると不可合せんから、晩の御飯の仕度が済んで了つてから、安雄さんの家へ行つて見ました。

太陽は最早榛名山の彼方の、名も無い冬姿の山の肩を滑べらうとして居て、冷たい風は黄昏をそゞり立てるやうに吹いて來ます。林から林に飛ぶ群雀は、たゞ騒がしく囀つて、彼方此方にチュツチュク／＼云つて居ます。私は其の冬の木立を眺めながら、土橋を渡つて、お隣家の表口から覗い



て見ますと、座敷の隅で安雄さんと作太郎とは、膝を突き合せんばかりにして遊んで居ました。

安雄さんは私を見ると、作太郎には構はず直ぐと立つて来て、

「姉さん僕ね、作ちやんと一所に、前の徳さんの家から五家まで行つて遊んで来たの……。今歸つた處なんだよ。それから種々の本を見せて居るの。可いだらう。」

「あゝ、有難うよ。ぢやア晩には私がお伽噺を話して上げるわ。」

と云ふと、安雄さんは大喜びで、

「お伽噺、面白いなア、僕お伽噺大好きなんだ、今してお呉れよ。」

「今は駄目、もう直き御飯だから……。」

「ぢやア晩、屹度だよ。」

と、安雄さんは念を押します。私は大きく點頭いて見せました。

作太郎は其の時まで、私達の方は振り向かうともせず、ボンチ繪の本が何かに見惚れて居ましたから、安雄さんは傍へ行つて、促し立てました。

「オイ作ちやん、姉さんが迎ひに来たぜ。」

「いゝよ、優梨なんて……。」

作太郎はまだ立たうともしません。安雄さんは、作太郎が私を呼び捨てに優梨なんてと云つたのに、むつと怒つて、

「君、優梨なんてたア何んだい。」

「……。」

「優梨ツて誰のことだい。」

安雄さんは餘程腹が立つたと見えて、突如、見て居る本を取上げて了ひました。作太郎は吃驚したやうな顔付で。

「優梨ツて……。」





云ひながら溢々指した作太郎の指先は、私の顔に槍のやうに向ひました。私はつれない思ひが湧きました。態と微笑んで居ました。

『優梨ちゃんには僕達には姉さんだぜ君、姉さんを優梨なんて……失敬な、もう一度云つて見ろ、僕撲るから……。』

安雄さんは真顔になつて、突き出した手は、一寸作太郎に當つたのですけれど、不意だつたので、どうと後に倒れて、ワツと泣き立てました。

私は吃驚して、『安雄さん。』と云ひながら、馳け上つて行つて、作太郎を抱え起して、

『もう分つてよ、さア作ちゃん、泣くんではありませんよ。』

私は云ふに云はれぬ思ひが胸に湧いて、熱い涙が瞳を覆つて來ました。それを拭く意氣地も無く、作太郎を抱えたまゝ泣き倒れました。

『だつて姉さんを優梨だなんて、失敬ぢやないか、失敬ぢやない。』



か。』

と云つて、何が哀しいのか、安雄さんもポロリ〜と涙を落しました。

『もう可いの、さア歸らうね。』

と、私はシク〜泣く作太郎を脊負つて、土橋の上まで來ると、安雄さんのお母さんが、安雄さんを大きな聲で叱り立てゝるのが聞えました。さア可哀さうにと思ふと、泣き止まぬ作太郎を、土橋の上から小川へ投げ捨てたいほど憎らしく思ひました。

(六) 叔母の毒舌

一寸手が觸つたゞけですから、痛くも痒くもない筈なのに、作太郎はまたシク〜と泣き止まぬので、また叔母さんに叱られることであらうと、私は恐々厨房から入つて、入りがけに、『もう黙るのよ。』と作太郎の耳に



口を寄せて、小聲で頼むやうに云ひましたけれど、其の甲斐がありませんでした。

我が兒の泣き聲を聞きつけて、荒々しく座敷から出て来た叔母さんの顔を見ると、作太郎はさも哀しうな聲で、また新らしく泣き出しました。

私は如何なることかと、ハラ／＼して居ますと、叔母さんは物凄く眼光で、私をグツと睨んで置いて、我が兒の作太郎にまで當りました。

『何をメソ／＼泣くのだ、やかましい、何を泣くんだよ。』  
と、着物の塵を拂つてやつて、

『誰に泣かされたんだよ、云つて御覽よ。』

斯様聞かれて作太郎は、今まで泣いて居たとは思はれない聲でもつて、

『安ちゃんだい。安ちゃんにだい。』

『如何して安ちゃんなんぞに泣かされたのだよ。』

『安ちゃん、優梨の奴のことを優梨つて云つたつて怒つたんだい。』

『何だとへ、優梨つて云つたつて安ちゃんが怒つて泣かせた？ 生意氣な

餓鬼だ。優梨さ、優梨で澤山ぢやないか、お優梨様なんて、誰が云へる

もんかね、馬鹿々々しい。』

叔母さんは毒舌を鋭く振つて、私に向つて來ました。

『優梨、お前は何か憎くつて、安の餓鬼なんかに入智慧をしたの？ 作が

左様に憎いのなら、構はないから私の前で虐めて御覽よ。さア。』

と云つて叔母さんは、泣いて居る作太郎を私の前へ突きつけました。私は

何う仕やうもない。たゞ／＼恐ろしさに身を慄めて、垂頭れて居ますと、

叔母さんは噛みつくやうな言葉でもつて、

『私の見て居る前で、さア、遠慮は無いから思ふさま虐めて御覽よ。』

と無理ばつかり。私は胸が惑々して物が云へません。やつと、『堪忍してく



「ださい。」と、咽喉から絞り出す思ひで云つて、知らず識らず逡巡しますと叔母さんは益々私の傍に寄つて来るではありませんか。

其處へ安雄さんが、草履の音をペタ／＼させて來ました、そして叔母さんの此の權幕を見ると、私を庇護つて、

「叔母さん、姉さんが悪いんぢやアないよ。僕だよ、僕だよ。僕が悪いんだよ。けども何方かと云ふと作ちやんが一番悪いんだ。」

「オヤ、作太郎が如何しました。」

叔母さんは眞目になりました。私は慌て、「安雄さん、可いから……」黙つてお出でよと、半分は口の中で云つて、袖を引いて止めましたけれども活潑な安雄さんは、今日ばかりは私の云ふことをきゝませんでした。

「姉さん可いよ、叔母さんが無理なんだから……、大丈夫だよ……。ねえ叔母さん、姉さんは僕達よりは大きいでせう、だから僕や作ちやんが、

優梨なんて呼び捨てにするのは不可ないでせう。それなのに作ちやんは……。おまけに作ちやんは従弟ぢやありませんか。」

「生意氣なことをお云ひでないよ、家ではね、優梨は優梨ですよ、優梨つて呼ぶのだと私が作に云ひつけて置いたのだから、構はないで置いてお呉れ。」

安雄さんは眼を圓くして、

「本當……、ぢやア小さい人でも大きな人と呼ば捨てにしても可いのだね面白いなア、僕は今日から叔母さんなんて呼ばずに、お秋つて呼んでやらうや。」

「私はね、お前のやうな小僧ツ子に呼び捨てにされるやうな悪いことはしないよ。」

「ぢやア姉さんだつて左様ぢやないか。」



安雄さんが餘まり云ひ過ぎるので、私はハラ／＼思つて、一二度は止めて見ましたけれど、安雄さんはきゝませんでした。

『分らない小僧だね、優梨はね、私の家の下女なのだよ、だから呼び捨てにするのは當前ぢやないか。』

叔母さんは本氣になつて、安雄さんと喧嘩をする氣で居るらしいのです。

『ほう下女、姉さんが下女、酷いことを云ふ叔母さんだなア、驚いたなア。』

『何も驚くことは無いぢやないか、下女だから下女だと云ふんだよ。左様な生意氣なことを云ふのなら、私にも量見がある。さア最早優梨の畜生も家に置くことは出来ない、さア／＼、二人とも出て行つてお呉れ、さア早く出てつてお呉れ。』

叔母さんは全く私達を追い出して丁ひさうな權幕です。私は泣くにも泣

かれず困つて了ひました。仕方がありませんたら、冷たい土に膝をついて

一生懸命にお詫びをしました。叔母さんは狂人のやうに怒つて了つて、

私の襟首を掴んで戶外へ突き出しました。安雄さんは憤慨して、

『姉さんを追ひ出さうなんて、左様なことが出来るもんか、可いや僕、祖母さんに云ひつけて来てやるから。』

と、奥へ上つて行かうとする處を、叔母さんは聲もかけず、後から大きな拳で、安雄さんの頭をコキンと打つて、力任せに戶外へ突き出して了ひました。

『お秋婆、打ちやアがつたな。鬼婆、畜生々々。』つて、安雄さんが泣き喚くので、私は犇と安雄さんを抱いて、『黙つてね、／＼。』と云ひながら、自分も思はず啜り上げて、一所にオロ／＼泣きました。

あゝ、私を庇護ふ意で来て呉れた安雄さんは、とう／＼叔母さんを怒ら





せて了つた。私の身は、あゝ、如何なるのでせう？

(七) 温かい家庭

夜の空気が何時の間にか襲つて来て、四邊はもう薄黒く染つて、人顔さへも分らないやうになりました。

私達が涙を拭いて起上つた時は、叔母さんの姿は最早其處に見えませんでした。座敷には洋燈が點いて、何を見ても懐しく見えます。私はじつと袖を噛んで、眺めるともなしに家の中を眺めて居ますと、安雄さんは草履を探して穿いて来て、

『姉さん、僕の家へ行かう。』

『あゝ。』

『僕のお母さんから、祖母さんに左云つて貰うから、心配することは無い

よ。』

と、安雄さんは痛さうに頭を撫で廻しました。私は他人の子供の頭を打つなんて、随分酷いことをする叔母さんだと思ひながら、安雄さんの傍へ行つて、優しく、打たれた處を撫で、やりました。

『堪忍してね、家へ歸つても打たれたなんて云はないで頂戴よ、ね、ね。』誰だつて自分の子を可愛く思はないものはないのに、本當に酷いことをする叔母さんだと、私はつくづく思ひました。打たれたなんて云つたら、どんなに安雄さんのお母さんがお怒りなさるだらう。それなのに今私が安雄さんの家へ行くのは、濟まないやうな氣もしますが、それから〜と話が纏れていも行くと、どんなことにならうも知れぬ、そしたら無祖母様が御心配なさるだらう。それやこれやを思ふと、此の先が氣遣ひで〜。

私は如何しやうもない。假にも疇を追はれたのですから、此のまゝ黙つ





てノメ〜とは、どう考えても歸れません。一層祖母様に……と思はぬでもありませんでしたが、其の曉に祖母様がお心を痛めなされる態が眼に見えて、恐ろしく、左様する勇氣もなく、氣は進まぬながらも、安雄さんに誘はるゝまゝ、お隣家へ足を向けました。

安雄さん許の小母さん小父さんは、一日の疲れを暖かい爐傍に休めて、微かな裸燈の輝く其の下を、二人の廣い〜世界のやうに、打寛いで、面白さうに話をなすつてゐました。

私達が入つて行くと、もう如何やら覺つたと見えて、不安の眼光を私達に浴びせて迎えました。

私は黙つて、夕暗に顔を反向け居ますと、安雄さんは今あつた事件の大略を語りました。けれども、打たれたことだけは雙手で頭を抱えたばかりで云ひませんでした。

『フン、始まつたな。』

と小父さんは云つたざりで、後は何にも云ひませんでした。小母さんの方は、私達を叱つたり慰さめたりして、そして夕飯を終つたら、様子を見て來て上げやうと仰有つて下さいました。

それから爐傍で、小父さんと、小母さんと、安雄さんと、私と、四人して鐙の光る釜を取巻いて食事になりました。何の御馳走も無いけれども、楽しい温かい家庭ですから、美味しいものを澤山喰べるよりは私は嬉しい！ あゝ私にも安雄さんのやうなお父さんお母さんがあつたら……。

夕飯を終ると、突如起つて、座敷から靴を持って來た安雄さんは、また爐傍へ來て足を投げ出すと、思ひついたやうに顔を上げて、

『お母さん、姉さんのことを叔母さんは下女だつて云つたよ、下女ぢやアないやねえ。』





如何なるだらう？ 私の身は祖母様の御病氣と一所に、愈々薄運に廻り行くのではなからうかと、悲しいことばかり思はれてなりませぬ。如何して斯うも不幸なのだらう？ 祖母様が始終口癖のやうに仰有る前世の約束とか云ふのであらうか、それならば仕方が無いと、思ひ断念めても見ましたが、矢張悲しい、涙が出る！

厨房が片付きましたから、私は安雄さんの書き方をする側へ来て、黙つて小父さんの草鞋を作るのを見て居ました。

暫らくすると小母さんは歸つて來ました。

小母さんは歸つて來たまゝ、黙つて爐傍へ座り込んで、黙と何か考えて居らつしやいます。私は心配で、堪りません、如何なつたのだらう、もしや此のまゝ……と思ふと最早悲しさが胸に籠み上げて來て、眼が何時の間にかまた濡んで來て、見まもつて居た小母さんの顔も見えなくなりまし



『大方下女にでも使ふ氣なのだらうよ。』

と云つて安雄さんのお母さんは、御飯を喰べ終ると、少しの憩ひを取らうともなさらず、直ぐと起つて洗ひ物に掛らうとしますから、私は急いで起つて、

『小母さん、私が洗ふわ。』

『可いよ、譯は無いから。』

『でも私にさせて……。』

無理に私は小母さんの手から襷を取つて了ひましたので、小母さんはそんならと云ふのでまた爐傍へ行きました。そして烟草を二三服喫ふと、烟管を置いて、夜延仕事に藁細工を始めやうとして居る小父さんにも黙つて、何處かへ出掛けて行きました。

私の家へ行つたのに違ひない。



た。

無口の小父さんは、作り上げた草鞋の片足を傍へ置いて、烟草入を引寄せて、一服喫つてから、

『如何なつただア？』

『何うも斯うも無いんだがね。』

と小母さんは瞳を私の上に落しましたが、後はまた黙つて、小父さんと顔を見合せました。

其の夜私は、恐々ながらも、家へ歸つて臥ることが出来ました。

(八) 記念の指環

其の夜初めて、私は床の冷さを知りました。

今日のやうなことには、今まで夢にだつて出會つたことはないのですか

ら、胸が鎮まるにつれて、不安の念は限りなく攻め寄せて来て、叔母さんの恐い瞳や、作太郎の意地悪い泣き聲などが頭腦を離れないで、胸が動氣を打つやうにオド／＼して、少しも安らかに眠ることが出来ません。

一時も過ぎ、二時も打ちました。

ガタ／＼と雨戸を叩く小夜嵐も、何時の間にか止んで夜はしんとなりました。私は祖母様に會ひたくつて堪らず、頭を上げて見ますと、叔母さんの前後も知らず眠つて居る姿が、枕元の豆洋燈に照らされて、微に鼾の聲さへ聞えます。私は密と起き上りました。

何も悪いことをするのではない、たゞ祖母様の寢間へ行くだけなのですから、叔母さんに知れたつて何でもありやしないわとは思ひましたが、それでも身體がワク／＼震えて、足も踏み縮らぬ程でした。

襖を密と開けて入ると、祖母様は眼を覺ましてお居で、私の悄然立つ



て居るのを御覽なされた。

『祖母さん！』

と小聲で云つて、私は枕元に摺り寄つて座りました。祖母様は怪し氣なる瞳を襖の彼方に流して、それから又、私の顔に移して、僅に首を振られました。

私は直ぐと、あゝこれは『黙つて』と云ふことだなと覺りましたから、静に起つて、音のしないやうに襖を閉めて来て、さて祖母様のお顔を見ると、如何しやう、少しの間に悲しいほどお瘦せなさいました。色艶なんてありません。私は悲しさを抑えて、頭髪の亂れを掻き上げて上げますと、祖母様は何かゴソ／＼と手を出されて、不意に私の手首に握られて、其のまゝ蒲團の中へ引き入れなされる。

それが餘りに唐突でしたので、私は何を祖母様はなされるのだらうかと、

吃驚して爲すがまゝになつて居ますと、祖母様は私の手を御自分の小脇に持ち寄せて、寢衣の袂を握れとばかり。

じつと肌に附着いて居たのであらう、温味のある左の袂、其處には何だか小さい堅いものがある。訝しく、探つて取出して見ますと、緊と細糸で縛つたもの！

私はそれを如何するのであらうと思つて、また祖母様のお顔に眼を移しますと、『解いて御覽』と仰有るやうでしたから、座り直して、手早く解いて見ました。

中には、叮嚀に四つに疊んで紙に包まれたお紙幣と、それから金の指環！

私は『まア』と云つて、驚かすには居られませんでした。そして金の指環の燦々するのに氣を吞まれて、思はずじつと眺めて居りますと、祖母様は



苦しうなお聲でもつて、

『お前に上げるのだから、大切にしてお置き。』仰有るうちに又た憎い咳、祖母様はそれを苦しげに蒲團の襟でお押えなさいました。

私は此の指環の譯も伺ひたいし、私からもお話ししたいことが数々ありましたが、祖母様が、叔母さん達の寝て居る座敷の方を氣遣つて、『早くお歸り〜』と、苦しい中から手を振つてお急ぎ立てなさいますので、私はたゞ悲しい思ひが胸一杯になつて、何にも云ふことが出来ず、指環と紙幣を緊と手に握つて、自分の臥床に歸りました。叔母さんは眼の覺めた様子は無く、鼾の聲も前よりは高いやうに聞えました。

私はほつとして枕に就きましたが、指環やお紙幣のことが氣になつて、如何しても眠られせん。

祖母様がお金を持つて居らつしやることは、精々とお稼ぎなさる上に、

僅かではあらうけれども小作からも上るので、大凡は推して居ましたが、

金の指環は如何したのであらう？

如何して斯様な美しい指環を持つて居らつしやつたのであらう？ それが私には不思議で〜なりませんでした。

左様なことは如何でも可いとして、私に密と斯様なものをお渡しなさる處を見ると、祖母様は最早此の世を去る覺悟をなすつて居るのではあるまいか……。と思ひついでには、悲しさ寂しさが又た急に襲つて來て、とうとう其の夜は、一夜まんじりともしませんでした。

(九) 亡き父の墓

東の白んで來るのを待ちかねて、私は叔母さんよりも早く起きて、祖母様のお寢つて居らつしやる隣りの間の襖を密と開けて、若しや如何かなす





つて居らつしやりはしないかと思いましたが、祖母様は何のお變りもない、相變らず慈愛の籠つた瞳を私に向けてくださいましたので、ほつと安心して、枕元の御用を足しました。

あゝ、斯様して私が始終お傍に居つたならば、夜など、たとへ終夜寝ないでも、一日も早くお快くなるやうに、心を籠めて御看護をして上げるのに……

私には如何しても、叔母さんが祖母様から私を遠ざけやうとする氣が知れない。随分な爲され方と、怨んでも見ましたか、少女の癖にはしたないと思ひ返して、平常の通り厨房で働きました。

叔母さんは起きて來られた。矢張り御機嫌が悪い。私は其の險しい眼光を浴せられるのが、朝寒の風に襟元を吹かれるより辛い。今にも叱られさうな氣がしますので、オド〜と立ち働きました。



朝の御飯が濟んだ頃、安雄さんの叔母さんは、心配さうな顔付をしながら、御親切にも様子を見に來てくださいましたが、私が無事に立ち働いて居るのを見て、安心して、二言三言祖母様の容態を聞いて、直ぐと歸つて行かれました。

私は餘程、昨夜のこと——金の指環やお紙幣を貰つたことを、安雄さんの家へ行つて打明けやうか知らとは思ひましたが、祖母様が、彼様にして内密にして私に下すつたもの、後で如何あらうとも、今は黙つて居た方が可い、左様だ黙つて居た方が好いと、私は誰にも話さないことに決心しました。

やがて薬取りに行く時刻になりましたから、私は薬瓶を持つて急いで家を出ました。急いで家を出た私の心の下には、何處でか、人に見つからないやうに、祖母様からの賜物を、晝間明るい處で、猶ほ能く調べて見たい





と云ふ念があつたからです。

誰にも見られない處と云へば、亡父の墓より他に無い——亡父の墓——左様だ、亡父の墓こそ祖母様の賜物を調べるに適當な處だ！と、私は急いで其處へ志しました。

亡父の墓は、背戸の杉林の細道を辿つて、お隣家と私の家との間を流れて居る小川について溯つて行つて、麥田の畔から丸木橋を渡つた廣い桑畑の中央にあるのです。其處には家根の隅々が朽ち垂れた小さな御堂があつて、其の御堂の周圍には、數知れぬ卒塔婆と石塔がある。——亡父の墓は其の北隅の、低い杉垣に圍まれた、角田家の墓所の隅の方で、行つて見ると、三年前に私が植えた楓の樹が、寒さうに霜を着て居ました。

私は嬉しいことがあつた時にも、悲しいことがあつた時にも、何時でも此處へ來るのです。私は急いで、藥瓶を持つたま、此の墓所へ駆け込ん

で、杉垣の蔭に踏みました。

何か、悪いことでもするやうに、私の胸は波立ちました。震える手で懐中から、祖母様から戴いた紙包みを出して見ますと、紙幣は拾圓札、それが五枚、叮嚀に四つ折に疊んであつて、其の包み紙には、「君島優梨子五歳」と書いてありました、君島？ 私は口の中で、幾度か君島々々と呟いて見ましたが、如何しても譯が分りません。私の家の性は角田、角田優梨子と學校の卒業證書にも書いてある……

おかしいこともあるのだと思ひながら、金の指環をじつと見ますと、それにも「君島」と彫つてありました。認印になつて……

一體君島と云ふのは何だらう？ 斯様して祖母様がくだすつた處を見ると、私と關係があるに違ひないが、それにしても如何いふ關係だらう？ 左様だ、どうしても祖母様に能くお話を承はらなければならぬ、左様







すれば何も彼も分るだらう、今夜また祖母様の枕元に行つて……と私は心に決めました。

それにしても、差詰め始末に困るのは五十圓のお紙幣、これは屹度祖母様が、私の行末の爲めに思つてくださったのであらう、有難い御心！私は涙が出るほど嬉しく思ひましたが、考へて見ると、どうして……、今の場合、黙つて知らぬ顔で受け納めて置くことが私に出来やう。

此のお紙幣さへあれば、町から良いお醫者と呼ぶことも出来れば、良いお薬を買うことも出来る、祖母様の大病を、此のお紙幣を持つて居て知らぬ顔をして居ることは、私には如何考へ直しても出来ない。叔父さん叔母さんの前へ潔よく出してつて、盡せるだけの手當を祖母様にして上げるのが、私達の責任である、左様するより他は無いと、私は堅く心に決めましたから、お紙幣は懷中に深く仕舞ひ込みました。

指環の方は如何しやう？ 私はいろ／＼と心に迷ひましたが、如何にしても手放したくなく、私とは斷つても斷れぬ縁あるもの、やうに思はれてなりませぬので頬吻して、深い考へがあつて爲た譯ではありませんが、其の「君島優梨子……」と書いてある紙と一所に、幾重にも／＼紙に巻いて楓の樹の下に匿して埋て了ひました。

後になつて考へると、私が斯様な心になつたのは、全く亡父の仰せであつたに違ひない！ 私が病院から歸つて見ると、座敷の方では容易ならぬ氣勢！

私はハツと思つて、胸は轟いて、夢中で駆け上るやうにして奥へ行つて見ると、祖母様の枕元には、叔父さんも、叔母さんも、安雄さん許の小父さんも小母さんも、心配さうな顔して集つて居られた。

あゝ祖母様は……と思ふと、私は前後を考へる邊もなく、人々を押し除





けるやうにして、祖母様に取りついて、静かに揺つて、

『祖母様……』

と思はずおろろ、聲。これを見ると叔父さんは、さも憎々しげに私の細い襟首を取つて、突き除けて、睨みつけて、

『彼方へ行つて居ろ。』

其の恐しい顔つたらありませんでした。

(10) あ、葉兒

『叔父さん、勘忍して……』

私は堪えて涙を拭きましたが、叔父さんの恐しい顔よりは、祖母様の苦しさをうな息遣ひの方が、身に泌み入るやうで、誰が何と云はふとも、私は、大切な祖母様のお傍を去ることではないと、心に決めました。

『堪忍するもしないもない、お前なんぞが来る處ぢやない。』

『……でも、祖母さんが……』

『何だ、祖母さんだ？ 祖母さんには違ひないが、お前なんぞの祖母さんぢやないぞ。』

『えッ？』

『左様に吃驚しないでも可い、お前は此家の娘ぢやないんだ。拾ひツ子なんだ。絶念めのつくやうに云つて聞かせやう。』

『もう十年も前のことだ。何處から如何して来たか知らないが、我家の門口で頓死して居た男の側に、お前はヒイ〜泣いて居たのだ。可哀さうだと云ふので、祖母様が拾ひ上げて育ててやつたのだ。何處の馬の骨の子とも分らない奴なんだ。』





あ、霹靂！霹靂一聲とは此のやうなことを云ふのであらう。私はもう涙も出ません、あ、夢？夢ならば早く覺めてくれよ。

と思つて居ますと、叔父さんは重ねて、嘲弄するやうな語氣で、

『古いことで忘れて了つたが、何でも其の時、其の男が握つて居た指環があつて、それに名字が彫りつけてあつたさうだが、惜しいことに祖母さんが失くして了つた。』

私はワツと泣き倒れました。私は如何しやう？斯様な悲しいことが世にあらうか、今の今まで温かい時とばかり思つて居つた所は、他人の……他人の……あ、如何しやう？私はたゞ泣くより外に仕様が無い！でも私は、祖母様のことを思ふと、如何しても他人とは考へられませぬ。

『嘘です、そんな事は嘘です。』



と、袂で顔を蔽つたまゝ、泣きじやくつて、必死となつて、自分の身を庇護ふやうに云ひますと、憎らしい叔父さんは、

『宮田へ行つて聞いて見る。』

と云ひます。宮田へなんて聞きに行かなくつても分つて居る、私は祖母様の……。

『祖母さんが餘り可愛がり過ぎるから悪いんだ、優梨、嘘か嘘でないか、祖母さんに聞いて見る。』

お、左様々々、祖母様に聞いて見やうと、私は叔父さんには返事もせず、祖母様のお傍に摺り寄りしました。

何と云つて聞かう？萬一祖母様が眞實だと仰有つたら如何しやう？と思ふと、胸ばかり亂れて、言葉が咽喉に問えて、一語も出ません。

『祖母様、わ、わ、私は……。』



後は云ふことが出来ず、悲しさが込み上げて来て、祖母様の心の底までも透るやうな哀れな聲で泣き入りますと、祖母様はもう眼を開く御氣力もなく、何にも仰有らずに蒼白めたお顔で、微に點頭いて熱い涙をじつと浮べられました。

そして見る／＼中に様子が變つて来て、『ゆ、優梨や、お、お前は……』の一語を此の世の名残りにして……。

『祖母さん、祖母様ア、わ、私……如何しやう……。』  
祖母さん／＼と、鬼も佛も一所になつて呼びましたが、祖母様の魂は遂に還りませんでした。

あ、大切の／＼の祖母様は、斯様して、六十二歳を一期として、遠い／＼陰府の國へと旅立たれました。

此の有様を見ると、叔父さんは憤り立つて、むづと私の襟髪を取つて

手荒く引寄せて、

『見ろ、貴様が騒ぐもんだから、とう／＼斯様なことになつちまつた。如何するか見やアがれ。』

と云つて私を突き遣りました。私は毬のやうにコロ／＼と轉んだ其の拍子に、懷中からバツタリ落ちた紙幣の包。

私はハツと思つて、拾ひ上げやうとする其の手を拂つて、叔父さんは手早くそれを自分の懷中へ捻ぢ込み、

『畜生、太い奴だ。』

と、それは／＼恐ろしい顔で私を睨みつけますので、私は、『堪忍してください、／＼。』

と、ひた謝りに謝るばかり、他に仕様がありませんでした。此の時、安雄さんの叔父さんは、見かねて又た打たうとする叔父さんを抱き止めて下さ





いました。  
あ、私は、寧ろ祖母様と一所に、黄泉とかへ行きたい、死んでしまいたいとまで、思ひ詰めました。

(一一) 夢の夢

其の翌日の夕方、祖母様の御葬式は、ほんの型ばかり、寂しく角田家の墓所へ埋葬されました。

平常から叔父さんの氣質を知つて居る人々は、一人も會葬しませんでした。たゞ僅に近所の、祖母様のお茶飲み友達が二三人寄つて来て、お通夜もすれば、後始末もしてくれました。叔父さん叔母さんの爲に泣いてくれる人はありませんでしたけれど、私の身を思つて、惜んでくれた人もありませんでした。



其の涙も乾かないうちに、私は住み馴れた温かい巢を追はれました。せめて四十九日の済むまでもと願つたのでしたけれど、それも叶はず、一七日の夜、情深い安雄さんのお母さんに引取られてお隣家へ行くことになりました。

私は、私の大好きな安雄さんと一所に居ると云ふことが、何よりの慰藉でありましたが、また行末のことを考えると、時雨る、袖の乾く間とはありませんでした。

其の夜のことでした。私が何かにつけて涙を密と拭いて居ますのを、親切な安雄さんのお父さんは見て、いろ／＼と云ひ慰めてくださいました。

其の後で、爐側で明日の朝の仕度をして居る小母さんに、『なアお咲、祖母さんは些とは貯めて置いたらうになア。』  
『そのことさ、五十や六十の臍線はあるだらうと云ふ噂だよ。』



『左様だらうともな、優梨ちゃんお前は知らないかい。』  
私わたくしはもう、わのお金かねのことは云いふまいと心こころに定きめて居ゐましたが、聞きかれ  
て見みれば嘘うそを云いふ譯わけにもいかず、悉すつかり皆はな話なして了しまりました。

『ふん左様か、ぢやアあの、優梨ちゃんを突き轉ころがした時とき落ちたのを奪とつ  
たと云いふのか、道理だうりで變へんな顔かほをしたが、左様か、酷ひどいことをするなア。』  
『まア呆あきれた、それで優梨ちゃんを邪魔じゃまにして、枕元まくらもとへ寄よせつけなかつた  
んだね。』

『それもこれも皆みんなな此方こつちが悪わるかつたのだ。平常ふだん足踏あしぶみも碌ろくにさせなかつた  
奴やつを、近所きんじよの義理ぎりから祖母おばあさんを無理むりに説とき伏ふせて、引張ひっぱり寄よせて此この  
娘こを虐いじめさせたやうなものだ。優梨ちゃん堪忍かんじんしなよ。』

『なんの、そんなことが……。』  
小母おはさんは何なにか考かんがえて居ゐるらしい顔かほでしたが、小父おぢさんに向むかつて、

『如何どうだらう一つ掛合かけあつて見みては……。』

『左様さうだなア、とても素直すなはには出だし居ゐるまいが、何なにも此この娘この爲ためだ。』

『明日あしたの朝あさでも行いつて御覽ごらんよ。』

『いや斯様かういふことは早はやいが好いい、今行いまつて來こやう。』

と、氣輕きがるに小父おぢさんは出掛でかけて行いきました。暫しばらくすると眞紅まつかに怒おこつて  
歸かへつて來きて、

『いや、何なんとも彼かとも云いひやうのない恐おそろしい奴等やつらだ。自じ分のことは棚たなへ  
上げて置おきやがつて、優梨ゆりちゃん盗ぬすんだのだなんてぬかしやアがつ  
た。本來ほんらいなら駐在ちうざい所しよへ突出つくだす處ところだが、可哀かわいさうだから許ゆるしてやつたのだ  
なんて……。俺おれも腹はらが立たつたから、如何どうとも勝手かってにしる、其その代かり今日けふ  
限かぎり近所きんじよ交際じやうかいは眞平まへい御免蒙ごめんかうむると云いつて、ピンと斷ことばつて歸かへつて來きた。』  
『まア左様さう、呆あきれたもんだね。』



『呆れて物が云へねえ、オイ安雄、もう隣家へ行つちやならんぞ。』  
 『誰が行くもんか鬼婆の家なんかへ、今度作ちやんが来たたら、ウンとゴリ  
 ーを食はしてやらア。』  
 と、安雄さんまでが腹を立て、とんだ飛沫が作太郎にまでいきさうです  
 私は、此の間も、あゝ祖母様が生きて居らしたたらと、返らぬことを思  
 つて居ました。

安雄さんのお父さんの話では、叔父の宮田村の家は、もう疾に村の財産  
 家に、借金の抵當に取られて了つて、やかましく立退きを迫られて居たの  
 ださうです。それで今度祖母様の死亡つたのを幸ひに、全然彼方を引拂つ  
 て了つたのださうです。

左様した人ではありませんが、それでも私は他人とは思へません、此の歳  
 まで育てられた祖母様の血族ですもの……。其の叔父さん叔母さんは私を

追出して了はれたが、幾年月かの後には、私を顧る時があるだろう。

あゝ私は、長い〜夢を見ました。これから覺めて將來を考えねばなら  
 ぬと思ふと、夢の昨日が泌々と思ひ出されます。

懐しい祖母様——叔母様の衰えた瞳は、私の胸の光りまで奪つて、暗い  
 失望の色ばかり残して逝かれた。私は其の色の消えた衣を纏つて、何處ま  
 で獨り歩まねばならないのでせうか？

叔母様に次いで、お顔も知らぬお父様——惨めな態で此の世を去られ  
 たと云ふお父様、私の植えた楓の樹、其の時は何にも知らなかつたが、今  
 更に懐しく願ひ返られる、大きくなつた。苔に蒸したお墓、残つた私、記  
 念の指環——私は何處々々までも、懐しいお父様の家、君島の家を尋ね、  
 ばならぬ。

私は其の夜一夜、終夜斯様なことを繰返し〜考え、考えては泣き、ま





云ふ優しい心でせう！  
 白張の提灯が斜めに吊された新らしい土饅頭に置く霜の、見るからが冷たさうなのを見ますと、私はもう胸が一杯になつて、あゝ祖母様は此の下に眠つて居らつしやる、何時までも眠つて居らつしやるのだと思ふとお葬式の時のことが又た思ひ出される。  
 お葬式の夜は、私は痛々しくつて眠られませんでした。何だかお墓の中で祖母様の蠢くやうな音がする、優梨や〜と呼ぶやうにも聞えますので夜の白むのを待つて密と此處へ馳けつけて来て、柔かい此の土饅頭の黒土に耳朶をつけて、じつと響きを聞いて見ましたが、何の聞えませう。それから後、幾度か此處へ来て叔母様のお聲を聞かうとしましたが…。あゝ私の祖母様は、とうとう何にも仰有らず、静に眠つておしまひなされた。



んじりともしませんでした。

(一一一) 朧な約束

翌る日は日曜日でした。  
 私は安雄さんを誘つて、眞白な霜道に散り敷く落葉を踏み分けて、祖母様のお墓参りに行きました。  
 冬の朝の空は清く晴れて、雲の影一つありませんでしたが、見仰ぐ瞳は曇りがちで、知らず〜溢れ落つる涙の露、旭日に照らされる赤城の裾野の松林——檜林——日陰窪の杉林までが、濕んで、露に濡れたやうに見えました。  
 やがてお墓に着きますと、安雄さんは線香の煙に咽せながら、私の亡父様のお墓にまでも供へて、小さい掌を合せて回向をしてくださいました。何と



祖母様は本當の孫でもない私を、死ぬる間際まで可愛がつてくださった  
あゝ其の懐しい祖母様は最早此の世に居らつしやらないのだと思ふと、私  
は限りなく悲しい、云ふに云はれず寂しい氣になります。私の此の寂しい  
悲しい心をもつて、浮世を辿らねばならぬかと、行末のことを考えますと、  
また袖がしとゞに濡れます。

そつと涙を拭いて、お墓の前から立上りますと、安雄さんは彼方の軒朽  
ちたお堂の椽に腰をかけて、トニ調の唱歌を口笛で唱つて居ました。

それにつけても記念の指環！ 私は叔父さんの口から指環のことを聞い  
た時から、此處に隠して置いたことが、頻りに氣にかゝつてなりません  
たが、私の身にとつては二つとない大切な品ですから、無暗なことをして  
人に見つけられては大變と、じつと耐えて好き機會を待つて居た……が今  
日こそは好き機會、早く掘出して見やう、埋める時には何にも知らずに埋め

たが、亡父の記念を掘出すのかと思ふと猶更に早く見たい。

私は急いで、懐しさの心に充たされながら、心覚えのあの楓の樹の下を  
掘りました。

軟かい地の下の、私より外には知るものゝない隠家に、私の生命とも思  
へる金の指環は、無事に、色も變らずにありました。私は安心して、土を  
拂つて、安雄さん〜と呼びますと、安雄さんは、墓石の間々を、縦横に  
潜り抜けて駆けて来て、そして私の掌の上に輝く金の指環を見ると、眼を  
圓くして、

『姊さん、それ如何したの？』

と、小聲で問ふのでした。

『これね、祖母さんにいたゞいたのよ。』

『祖母さんに……』





へあれば何時か知れる時があるだらうと思ふのだから、此の指環は私の寶物だわ。』

『うん左様だ。ぢやア早く此の指環で尋ねて見ると可いや。』

安雄さんは無邪氣に云ひます。

『けれど左様直ぐと知れやアしないわ、一年かゝるか、二年かゝるか、それとも五年かゝるか、十年かゝるか……、十年かゝつても知れさへすれば可いけれども、知れないかも分らないわ。』

私は、雲の行衛のそれにも似たやうな、亡きお父様の家のことを思ふと曇つた夜の空に星を求むるよりも難いこと、覺悟をしなければならぬと思ひました。

『早く姉さんの家が知れ、ば可いなア、僕も一生懸命に尋ねて見やうか。』

『あ、尋ねてくださいね、今に安雄さんが大きくなつて、君島と云ふ人が



と、安雄さんは點頭きました。

『祖母さんにいたゞいたのだけれど、隠し場所が無かつたから此の樹の下に埋めて置いたの、光つてるでせう。』

私は、これが亡父様の記念でもあり、祖母様の記念でもあるのかと思ふと、懐しさが胸に漲りました。

『うん、けど姉さん可かつたねえ、叔父さんに奪られないで……。』

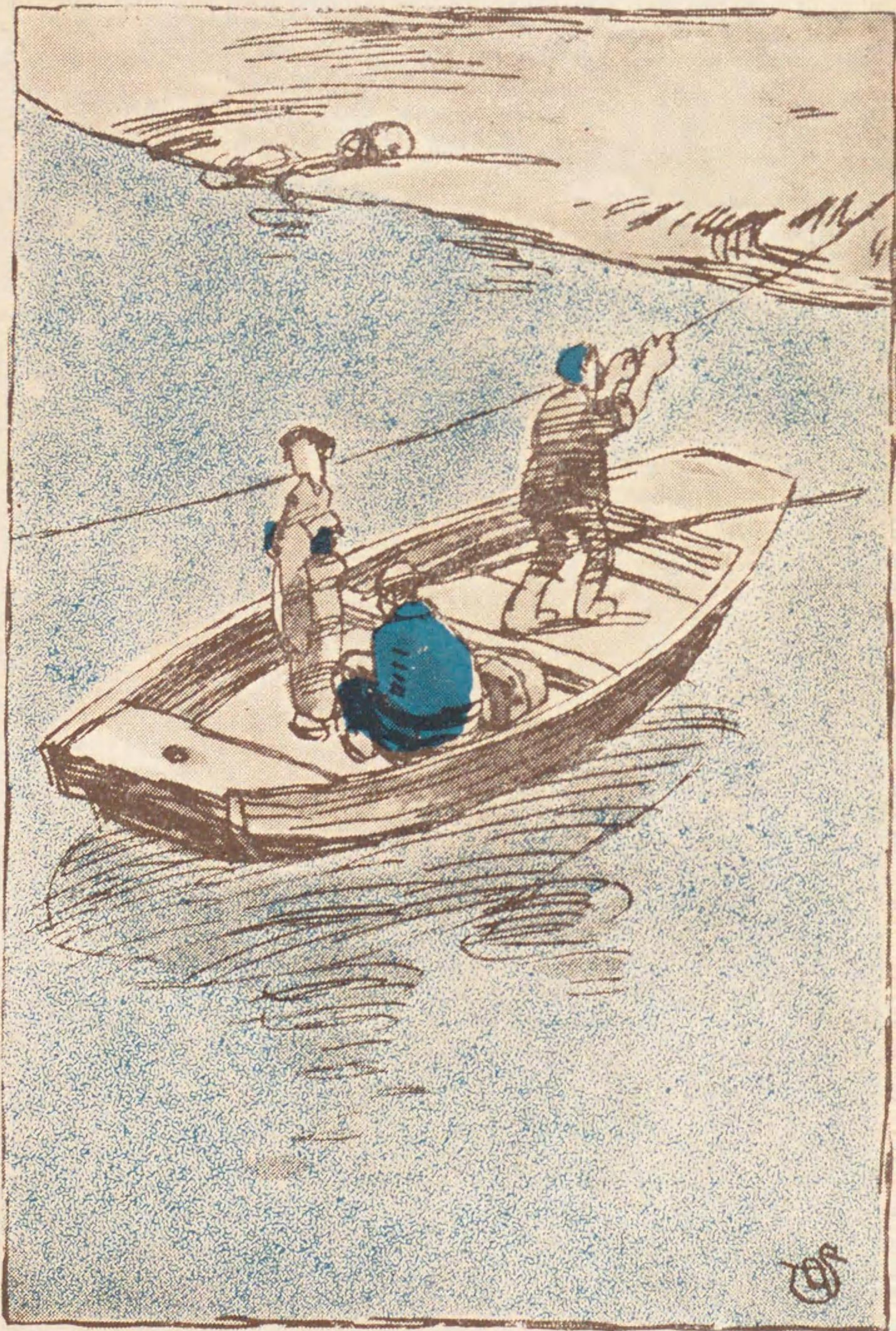
と、安雄さんは珍らしさうに眺めるのでした。

『左様よ、これを奪られて了ふと、それこそ私は死んで了ふより外はないわ。』

『如何して?』

『如何してつて、ほら、私は本當は祖母さんの孫では無いでせう、だから死んだお父様の家が何處かにあるに違ひないでせう、それが此の指環さ





あつたら、よく聞いて頂戴ね。』  
 『う、ん、僕大きくなつてからでなくつても、今だつて聞けるよ、學校ぢやア僕は質問は巧いんだぜ。』  
 安雄さんは何時もより元氣が好い。

(一三) 今は我身

其の時私は、不圖斯様なことが胸に浮びました。  
 それは此の夏のことでした。或る晩、小母さんと安雄さんとが私の家へ来て、いろ／＼と話に花を咲かせましたが、其の後に、祖母様は安雄さんの頭をを撫で、  
 『安ちゃんや、お前はお母さん肖だね、お母さん兒の故だらう。』  
 と、笑ひながら云ひますと、安雄さんは首を振つて、





「祖母さん、僕は誰にも似ないの。」

「ぢやア誰に似たの？」

と、私が傍から云ひますと、

「僕ア乃木大將に似てるんだ。」

「途方も無い、乃木大將に似てるなんて、お前は家のお父さんが赤城山か

ら拾つて来たんだよ。」

意外の言葉に安雄さんは眼を見張つて、

「嘘だ。」

と云つたが、猶ほ不安の顔をして居ますと、安雄さんの小母さんは態と眞面目になつて、

「嘘なもんかね、嘘だと思ふなら祖母さんに聞いて御覽な。ねえ祖母さん安雄は赤城の松原に打棄つてあつたんですね。」



と云はれて、安雄さんはベソをかき始めました。すると祖母様は、  
 『嘘だよ、そんなことは嘘だよ、ねえ安ちゃん。僕は須田の家の長男です  
 つて、威張つておやり。』  
 と仰有りました。私は其の時つい安雄さんを調戲つて見たくなつて、  
 『嘘よ、安雄さんは眞實に赤城山に棄てられて居たのよ。』  
 と云ひますと、彼様に優しい祖母様は、何時にない恐い顔をして、私を睨  
 んで、  
 『お前は黙つてお居で。』  
 とお叱りなされた。

私はこれに懲りて、それから決して、冗談にも棄兒とか拾ひ兒とか云  
 ふことは云ひませんでした。今になつて考えて見ますと、拾ひ兒だつて  
 調戲つてやつた安雄さんは、祖母様の仰有つた通り、立派に兩親揃つた須

田の家の長男で、私こそ親も分らない棄兒であつたのでした。

彼の方に祖母様が、其の事を私に語つてくださったつたら、私は身を粉に碎  
 いても祖母様のお氣に召すやうに働いたものを……左様なことゝは知ら  
 ずに十年と云ふ長い間、お世話ばかりやかせたのは、思へば思ふほど空  
 恐しい、勿體無い！

私は安雄さんの顔を見ると、又たムラムラと悲しくなつて來ました。拾  
 ひ子と云はれてベソをかいた安雄さんが、眞實棄兒の此の私を慕つて、姉  
 さん……と呼んでくれるかと思ふと、抱き締めたいほど可愛い！ 出來る  
 ことなら勉強させて、豪い大將にならせた。

左様だ……、私は安雄さんの成功を見るのと、君島の家を探るのが一生  
 の希望。如何な辛いことがあつても、耐えて……、これだけは如何しても  
 仕遂げなければ、可愛がつてくだすつた祖母様の御恩も、お世話になつた





安雄さんの小母さん達の御恩も返せない。

私が斯様なことをいろ／＼と考へて居る間に、安雄さんの姿が見えなくなりなりました。何處へ行つたのだらうと四邊を見廻しましたが、それらしい物の氣勢もしません。では先へ還つたのだらうか知らと思ひながら、『安雄さアん』と呼んで見ますと、背後の杉垣の蔭でク、と忍び笑ひする音が漏れて聞えました。

私は思はず莞爾しまして、『もう分つてよ。』と云ひますと、安雄さんは得意さうな顔して出て来て、『分らなかつたらう。』と云ひました。私は『あ、』と軽く返事をして置いて、さて、

『金の指環のことは誰にも云ふのでは無くつてよ。』

『お母さんにも？』

『小母さんには私が話すわ。』

『ぢやア誰にも話すものか。』

私達は打連れてお墓を出ました。

(一四) 東京から

それからお正月までは、別段書き記すべき事もありませんでした。たゞ悲しさと寂しさに満たされながらも、安雄さんの家の爲に、何呉れとなく立働きました。

其の間には、叔父にも叔母にも度々會つて、顔を合せることがありましたが、如何思つて居らつしやるのか、私が叮嚀にお辭儀をしても、知らぬ風をして、會釋一つしてくださいませんでした。

歳暮には村の彼家此家から、搗く臼の杵の音が響き立つて、門々の松飾も春めいて來ましたが、私には如何しても、其の春を楽しく迎ふる心にな



れませんでした。

一夜明けて、瑞雲棚曳ける元日の空も、それはたゞ他人の春とのみ思はれて仕方がありませんでしたが、心を取直してやつと、亂れた髪を自ら束ねて、御恩になる小母さんや小父さんに年始の御祝儀を申し上げます。私に引反へて安雄さんは、お正月が来ると云ふので、先頃から夜も碌々寝ないで、勇み立つて、外でも家でも元氣の好いこと、私を相手にするばかりか、小母さん達まで遊び仲間に引入れては、一人興がつて居るのです。その楽しい松の内も終つた翌日の夜、安雄さんが寂しさうに庭に立つて居ますと、郵便局の集配人が来て、『郵便!』と威勢の好い聲で云つて渡すのを、安雄さんは受取つて、いきなり家の中へ駆け込みました。

『お母さん年始状。』

『年始状? 何處からだい。』

と、私と向ひ合つて、炬燵にあたつて居た小母さんは、振返つて聞きますと、安雄さんは洋燈の下へ其の葉書を持つて来て、じつと見て居ましたが、『東京……、本……本何だらう?』

『本郷ぢやなくつて? それとも本所?』

と、私が側から教へるやうに云ひますと、安雄さんは直ぐと私の前へ持つて来て、

『うん左様だ、本郷だ、本郷春木町三丁目須田登美子だ、ねえ姉さん、左様でせう。』

『左様よ、よく讀めるわね、登美なんてむづかしい字が……。』

私は葉書を安雄さんの手から受取つて、更に讀み直して居ますと、小母さんは、

『それなら安雄にも讀めるだらうよ、親類先のものだから……。東京の本



郷で須田と云へばお登美さんより外に年始状を呉れる人は無いからね。』  
 『うゝんお母さん左様ぢやないよ、僕だつて此位の字は讀めらア、能登の  
 國の登の字と、美事の美ぢやないか。』  
 『えらい〜、それでも讀めるやうになつたなア。』  
 と、小母さんが慈愛に満ちた聲で云ひますと、安雄さんは首を振つて、  
 『左様さ、僕今年は十一なんだもの。』  
 『ぢやア此方の字は？』  
 と葉書の裏を反して云ふと、安雄さんは碌々私の指差す文字は見もしな  
 いで、大きな聲で、  
 『謹賀新年。』  
 『オアこれが謹賀新年？』  
 『勿論。』と安雄さんは勢ひ好く答へましたが、それでも氣になると見えて

『どれ……』と云ひながら覗き込んで、一寸きまりの悪さうな顔して、『知ら  
 ないやア。』と云ふが早いか、厨房の方へ行つて了ひました。  
 其の様子が何とも云へず可笑かつたので、私はお正月になつて初めて笑  
 ひくづれました。小母さんも笑ひました。安雄さんが盲讀みをした葉書の  
 文句は、恭賀新禧と云ふのであつて、傍に、それより小さい字で、平素の  
 疎遠を謝すとしてあつたのです。  
 須田登美子、ついぞ聞いたことのない名、不審に思つて小母さんに、何  
 う云ふお方なのと？ と尋ねると、小母さんは、私の里へ來た嫁の親類だ  
 と答へました。御職業は看護婦だとのこと。  
 私はたゞ左様と云つたばかりでしたが、小母さんは何か氣付かれた様子  
 で、頻りに點頭いて居られましたか、小父さんが歸つて來ると、東京から  
 の葉書を見せて、何時に無いこと密々話。





私達は、左様いふ量見からでは無いんだよ。可いかね、よく聞いてお呉れよ、お前のお父さんと云ふ人だつて、零落はしても金の指環の一つも持つて死んだ處を見ると、満更の人ぢやなからうぢやないか。私達のやうな貧乏人ぢやア……、そのお父さんの家を探すつたつて、此様な田舎に居ては到底知れつこはないから、遅かれ早かれ私は東京へ出さうと云ふ覺悟は持つて居たんだがね、何を云ふにも此の暮し向きでは如何する事も出来ないし、困つたもんだと思つて居た處だつたから、實は……、昨夜の年始狀で不圖考えついたんさ。それも聞き合はして見なければ、此方ばかりで定めたつて仕方が無いが、お登美さんは自分で看護婦會を立て、居るのだと云ふから、一人位如何かならんことはあるまい。兎に角行つて世話になつて、一人で食べて行かれるやうになつたらば、お父さんの家の君島とか云ふ家を探すのも可からうし、また都合に依つて此



小父さんは暫らく、黙つて腕を拱ぬいて思案をして居たやうでしたが、やがて烟管を置いて大きく點頭いて、『成程それも可からう。』と小母さんに云ひました。何のことか私には分りませんから、わざと見ない風をして、此方で安雄さんと遊んで居ました。

(一五) 問 合 せ の 手 紙

其の翌日、小父さんも居らず、安雄さんも遊びに行つた留守に、小母さんは私を爐側に呼んで斯様なことを云ひました。  
『何うだね優梨ちゃん。お前は看護婦になる氣は無いかね。』  
私は突然の話で、何と答へたら好いか分りませんから黙つて居ますと、小母さんは私の顔を繁々と見て、  
『此様なことを云ふと、もう荷厄介にするのかとお思ひだらうが、決して



の土地へ歸つて來るのも可からう……。どうせ一遍は東京へ出なければなるまいから、看護婦になつて見ても……。』

優しい小母さんが泌々と語り聞かしてくだされた。何の小母さんが私を邪魔にすると思はう、私の行末を思つて、私の幸福を祈つてくださる、その親切なお心に對して、私は何とお答をしやう？

祖母様のない後は、他に便る人の無い私、親とも思ふ小母さん小父さんそれに暮し向きに餘裕の無いのも、私が多くなつただけ、骨の折れるやうになつたのも知つて居る。ですから私は、下女にでも機織りにでも、奉公に出してくださいと願つて見やうかと思はないでもありませんでしたが、左様なことを私から云ひ出しては、反つて親切を無にするやうになるかも知れないと、たゞ何事もお心任せと、じつと控えて居つたのです。

看護婦の話は私にとつては天からの福音であるかも知れない、私はた

小母さん達の好いやうにしていたゞく他に思案は無い。

『今直ぐ定めなくてもいいことなんだから、よく考えて御覽。』

『私も考えて見なくつてもいいの、小母さんさへいゝなら……。』

『いゝえ、私が行くんぢやないから、お前の覺悟が第一だよ。』

『覺悟つて私何んなにも辛棒しますが、たゞ小母さんや安雄さんに別れるのが……。』

『別れるのが辛いつてお云ひのか、何だね優梨ちゃん、芝居ぢやないんだよ。此様な處に何時までも居て御覽、それこそ一生土堀りで、小母さんのやうに稼いでもいゝ、貧乏しなればならないよ。』

と云つて、小母さんは我身を顧みて嘖と吐息をつきました。

『よく考えてお置き、その積りで問合せの手紙だけは出して置くから……。』



私は、『何卒宜しく。』と云つて其の座を起ちました。小母さんの前を起つて、一人になつてから考へて見ると、両親も無い木から落ちた小猿のやうな私は、如何しても自分一人で生活する道を立て、そしてから亡くなつたお父さんの君島の家を探すより他は無い、自分一人で生活すると云つても、私のやうな少女では、奉公でもするより他に仕方は無い、そして憂い目を見て泣くよりは、たとへ二年が三年でも、じつと辛棒して看護婦になる勉強をするのが増しであらう。学校へ行つて居た時分に、先生から看護婦の職務と云ふのを教えていた。いたが、女にとつては此の上も無い楽しい、貴とい、輝きのあるものと思つた。私は其の時無上とそれになりたくつて、讀本を抱えたまゝ、『お次ぎ。』と呼ばれた先生のお聲も耳に入らず、指端で一寸頬を突かれて初めて氣がついて、お友達からクス／＼と笑はれた昔のことを、まぎ／＼と思ひ

浮べました。左様だ！ 私は看護婦にならう!!! それから二三日経つて、小父さんは長々と書いた手紙を東京へ出ししました。

私は其の返事をどんなに待ちましたらう。

(一六) 別れの前日

一週間ほど経つてから、東京から返事が來ました。私はお伽噺に聞いて居る浦島太郎の玉手箱を見る思ひで、オド／＼して、小父さんの讀むのを聞いて居ると、幸ひ一人欲しいと思つて居る處だから、早速上京させて貰ひたいとありました。

三人は顔を見合はせて重荷を下したやうに、噂としました。



何時行く何時遣らうと云ふ相談が、小母さん夫婦の間に極まると、私は急いで衣服の洗ひ張りや何や彼や仕度にかゝりました。安雄さんは左様と聞いてがつかり氣を落して、浮かぬ顔でいつものやうに、元氣好く遊ばないで居るのを見ると、可哀さうで、上京してからの私の身も案じられて、氣が澁つてなりませんでした。

小母さんも時々には、針を持つて助けてはくさいましたが、思ひのほか日數がかゝつて、二十日頃にはと思つたのが、お正月の末にやつと出發出来るやうになりました。

初めのうちこそ涙を幾重にも包んで、いざ訣別と云ふ時になつても、眸に露を結ばせまいと固く心を定めて居りましたが、出發の日の近づくに従つて、一枚々々決心の壁は破れて、愈々明日はと云ふ前の日になりますと涙は容捨無く露と零れました。

ちよろ／＼と流れ來り流れ去る春戸の小川の水のその如く、行衛定めぬ私の旅路、浮世の響高き都の町に出づる心の態は、説き記さうにも其の言葉が分りません。懐かしき故郷と、懐かしき人の別れにのみ思ひは馳せて、胸の曇りは掻き消すことが出来ませんでした。

午後、私は、亡父様のお墓と祖母様のお墓とに詣でました。

七草の鳥追ふ宵から降り出した白雪は、翌朝になつて、村から村へ綿帽子、美しく化粧させて止みましたが、それから續いて二度も三度も降りましたので、墳墓の上に積つた雪は深かうございました。

父の墓——祖母様のお墓——。

其の二つのお墓の前で私の誓つたことは、東京へ行つたら撓まず勉めて、父の残されたる娘、祖母様に育てられたる少女として、屹度聖き名を上げて御覽に入れますと云ふ意味でありました。





雄さんが、帽子の前庇を眼深に、雙手を振つて學校から歸つて來ました。それを見ると私は、大きい聲で『安雄さん——』と呼びました。安雄さんは私の聲を聞くと、大きな眼で四邊を見廻しながら、

『姉さん何處？』

『安雄さん、此處よ。』

私が手を叩くと、漸く見つけて、飛んで來ました。

『なあんだ、此處に居たのか。』

『え、分らなかつたの。』

と云ひながら、私は安雄さんの緩まつた兵古帯を締め直して、裾を引き延してやりました。

『姉さん本當に明日行くの？』



たとへ花の香が過ぎて、葉櫻の年配になつても、君島の家を尋ね當てないうちは、私は人らしい薄衣は着まいと誓ひました。

振分け髪ふりわけがみの五歳いつとの年としから、これまでに育て、くだすつた祖母様の御恩ごおん、それに酬むかゆるに今いままで熱あつい涙なみだ許ばかり、私わたくしが行末ゆくすゑ、萬まん一如どう何どうかして心こころが迷まよつて誠心まごころの消きえ失うせやうとする場合ばあひがありましたならば、お父様も祖母様も、草葉くさばの蔭かげから何卒私どうぞわたくしを叱しかつてください……。

私は傾かたむきかけた日脚ひあしを浴あびて、祖母様の御臨終ごりんじゆうを追想つひまうしました、私わたくしを捨て、逝ゆかれた祖母様、私わたくしを憎にくんだ叔父おぢや叔母おば、寒氣さむけがすると仰おつしや有あつた其その夜よから、不安ふあんで溜たまらなく、たゞ泣ないてばかり居をつた其その時のことを思おもふと、悲かなしき夢ゆめのそれからそれと、思おもひ設まうけぬ成行なりゆきになつたのには、自分じぶんのことながら驚おどろかれます。

不圖人ふとひとの足音あしおとが聞きこえましたから、細ほそい畦道あぜみちを見込みこみますと、向むかふから安やす





「えゝ。」

「僕淋しいなわ。」

「それは安雄さんばかりぢやないわ、私だつて淋しいわ、けど仕方が無いわ。」

「何時歸るの？」

「何時歸れるか分らないの。それよりは安雄さん、早く大きくなつて東京へ来てくださいよ、私それを待つてるわ。」

「そんなこと、何時のことだか分らないぢやないか。」

と安雄さんは淋しく笑ひました。

「どうせ東京へ行くんでせう？」

「何うだか。」

「だつて東京へ行つて勉強しないと豪い人にはなれないぢやないか。」



「姉さんも豪い看護婦になるんだらう。」

「そりやあなりたいわ。」

「ぢやア僕と競争しやうか。」

「えゝ、仕ませうとも。」

「僕なんて男だ、負けるもんか。」

安雄さんは肩をいからせて、勇んで見せましたが、直ぐとまた悄れて、眼を曇らせて、

「僕つまらないなア。」

「安雄さん、男がつまらないなんて云ふもんぢやなくつてよ、それよりは早く大きくなつて、私の家を探してくださいね、ほら、過日此處で約束した通り……。」

「あゝ、僕は約束したことは忘れやしないや、屹度の證據に指の輪をやつ





て置かう、さア姉さん。』

『指の輪？ あゝ、何卒。』

と、私は右の手の拇指と人差指とで、小さい輪を拵えてそれを出すと、安雄さんはそれを通して、自分でも小さい指の輪を拵え、思ひきり頬を膨らせてプウと吹いて、それと同時に強く曳きました。輪が破れると、安雄さんは真面目くさつて、

『ね、好いだらう。』

『えゝ。』

それから私は父の墓、祖母様のお墓に、限り無き名残りを惜んで、お暇乞ひをしました。

『安雄さんは私が居なくなつても、梅の咲く頃は梅の花、山吹の咲く頃は山吹の花、夏だつて秋だつてお墓へは花を拵けてくださいね。』



『うん、僕ア美麗な花が咲いてる處を知つてるよ、今から取りに行かうか。』

(一七) 學校友達

其の夜私は安らかに眠れませんでした、いろ／＼の思ひ出は限りなく枕の下に集つて、小さい私の胸から溢れました。

漸く破れ戸の隙間から曉の光りが訪れますと、安雄さんまでが眼覺めて騒ぎ出しました。叔母さんが朝食の用意をする間に、小父さんは私の荷物を纏めてくださいました。私は此の懐しい家庭を捨て、出て行くのかと思ひますと、新しい悲哀は胸に逼つて来て、又しても涙！

朝食が済むと、小母さんはいろ／＼と旅立つ少女の心得ともなるべきことを繰返して注意してくださいました。私の此の時の心地は、祖母様と永





のお別れをした時のやうでした。袖は絞り勝ちで、旅立たうと定めた其の心を悔ゆるほどでありました。

安雄さんは渡し場まで、小父さんは前橋まで送つてくださると云つて、もう草鞋を踏みしめて、私の出るのを待つて居られます。

『ぢやア小母さん行つて参ります。』

と、私は手をついて叮嚀にお辭儀をしますと、小母さんは、

『何だね、改まつて、それよりか達者でね、よく勉強をなさいよ。』

『小母さんもお達者でね。』

『あゝ達者で居るとも、私のことなんざ心配しないで、時候の變り目には猶ほのこと氣をおつけよ。』

私が露と降る涙を振り拂つて立つと、小母さんも頼りなげなお顔をして土橋の上まで送つてくださいました。



あゝ、空も曇つて居ます。

私は街道を横手に抜けて、懐しい祖母様の家——私の古巢の庭に出ました。そしてそつと家の中を覗いて見ますと、恰度叔母さんが居ましたから斯様々いふ譯で東京へ行くことになりましたと告げて暇乞ひをしますと『あゝ左様かね。』と云つた限り、まるで他人のやうな挨拶をなさいました。

どんな挨拶をなされやうと、私はこれで心が濟みましたから、此處を出て、さつ／＼と街道を下つて行く小父さんの後を追つて、小走りに走つて行きますと、路傍の杉の木蔭に安雄さんが居ました。振り返つて見ると、情深い小母さんは、雪風に吹き晒されて、まだ土橋の上に立つて居るではありませんか。

『小母さん、寒いから最早どうぞ家へ入つてください。』

私の此の叫びを聞くと、小母さんは幾度か合點々々をなさいました。あ



「！ 此の枯れ切つたやうな杉の森を出外れれば、もう懐しい故郷は後になるのだ——と思ふと、私は止め度もなく涙が湧いて……」

暫らく歩いてから、私達は又た振り返つて見ると、まだ小母さんは土橋の上に吹き晒されて居られます。何と云ふ懐しい小母さんでせう。

『お母さん。』と安雄さんが呼ぶと、

『オーイ。』と、微に情にこまれる聲が響いて來ました。

其の聲の聞えたのを最後に、私は涙を振り切つて、安雄さんに曳かれるやうに道を歩いて、一步步々故郷の地を離れて、北原と云ふ處から小さい森の脇を下つて、利根川の渡し場へと來ました。

私は道々、共に學んだお友達のこと、殊に戸塚の道子さんのことを、思ひ浮べぬではなかつたが、祖母様が亡くなつて、拾ひ兒と云ふことが分つてからは、何となく面伏せで、人に顔を見らるゝのが辛く、賑かな處へは

成る丈け出ないやうにして居ましたので、もうお友達にも會ふことが出來ないかと思ふと、寂しさが犇々と襲つて來て、頻りに昔が偲ばれてなりませんでした。

やがて河原續きの小松原が盡きると、蜿々と枝を張つて繁つた大きな松が一本あつて、其の下の茅屋が渡し場の船頭の家、河風を避ける爲に藁垣が廻らしてありましたが、その彼方をチラと見ると、紫色の肩掛を襟深くした少女が、行李に腰をかけて居る小父さんと何やら語つて居ます。安雄さんは私に擦り寄つて、

『姉さん、道子さん。』

『え、左様のやうね。』

私は今も心に繰り返して居た其の人の姿が見へたので、胸は波立つて來ました。





『でも會つて好かつたわ。』  
 道子さんは斯様いつて、噂と息をつきました。  
 『堪忍して頂戴ね。』  
 私は僅にこれだけ云つて、耐えられず其の人の肩に顔を埋めて了ひました。  
 『もういゝことよ——だつてね私、貴娘の祖母さんがお亡くなりなまつてからのことを噂に聞いたでせう、だから如何なすつたらうと思つては居たのですが、生憎お目にかゝる機會が無いので、たゞ心配ばかりして居たのよ。』  
 嬉しい友の心！ 小父さんは私達二人が、情の籠つた話を取交して居るのを見ると、安雄さんと呼んで船頭の家へ入つて行きなした。  
 私は詫びるやうに、東京へ出るやうになつた始末を語ると、道子さんは



『屹度姉さんを送つて來たんだよ。』  
 『だつて知つて居る筈が無いぢやないか。』  
 『誰かに聞いたんだよ。』  
 囁き合ひながら近寄つて行きますと、道子さんは轉ぶやうに私の傍に走り寄つて、雙手で犇と手を握つて、  
 『優梨子さん、貴娘東京へ行くんですつてね。』  
 『え、。』  
 私は何だかきまりが悪い。  
 『私今お使ひに出た途中で、小父さんに會つて初めて聞いたの……、貴娘も随分ね。』  
 私は何と答へて好いのか分らない、たゞ懐しい其の人の顔をじつと見詰める時、自づと涙が眼に一杯になりました。



涙をそつと拭いて、いろ／＼と私を慰めてくれました。

(二八) 振れる帽子

利根川の川瀬と共に、流れつきせぬほど私達が語り合つて居ますと、安雄さんは雙頬を眞紅にはてらせて飛んで来て、

『姉さんまだ……？』

『もういゝの、船の仕度は？ ぢやア行きませう。』

私が黙頭つたのを見ると、安雄さんは小父さん呼びに戻りました。私等はそれから／＼と續く話を捨てかねて、語り合ひながら白砂續きの渡し場まで来ました。

船頭の家の方から、小父さんが行李を擔ぎ、續いて安雄さんが私の風呂敷包みを持ち、其の後から船頭がブラ／＼棹を肩にして来る姿を道子さん

は見ますと、寒い河風に襟元を吹かれながら、震えるやうに肩を窄めて、私の側に擦り寄つて来て、

『優梨子さん笑つちや嫌やよ、これね、ほんの私の志ばかりなのよ、けれど今見ないで頂戴ね。』

と、道子さんは、顔を心もち赧めて、微笑みながら密と手から手に渡しますので、私は何を道子さんがくだすつたのだらうと思つて、握つて見ますと、手編みのレース絲の巾着——しかも中にお錢さへ入れて……、私はハツと思つて、

『あらいゝのよ、こんなことしていたゞいては私困るわ。』

と云つて、戻すやうにしますと、

『昨日にでも知つたのなら、どうかすることも出来ましたらうが、今途中で聞いたので、あんまり失禮ですけれど……。』





處まで親切な道子さんだらう！ 私は出せるだけ大きな聲を出して、  
 『左様なら、御機嫌よう。』  
 と、名残りの聲を川面に響かせますと、道子さんの方からも、  
 『御機嫌よう。』  
 私も白の木綿のハンカチーフを出して、それを振りました。すると傍に  
 居た安雄さんが、  
 『道子さアん。』  
 『ハイ。』  
 と道子さんが返事をなさいました。其餘韻の盡きないうちに、船は向ふ  
 岸に着きました。道子さんは河原路を歩み艱んで戻つて行かれる。私は其  
 の後姿を遠く見送りながら、  
 『安雄さん、今度は貴郎と別れるのね。』



道子さんは真顔になつて、無理に私の帯の間にそれを押入れて、  
 『東京へ行つたら葉書を頂戴ね。』  
 『え、直ぐ出すわ。』  
 二人が最後の握手をして、訣別を惜んで居りますと、安雄さん等はもう船  
 に乗り込みました。  
 『屹度よ。』『え、』と、互ひに強く／＼手を握りしめて、私は別れともな  
 き道子さんに別れて船に乗りました。  
 吊繩が振り動いて、船が岸を離れると、道子さんは聲を曇らせて、『御無  
 事だね。』と、私の今度の旅立ちを案じてくださる。私は胸が一杯になつて  
 何にも云ふことが出来ませんでした。  
 船は何時の間にか波の騒立つ中流に出て居ました。道子さんは寒い河の  
 岸に立つて、紅い絹ハンカチーフを振つて名残を惜んでくださる。あ、何





あゝ何と後を云つたら、私の心が云ひ盡せるやら……、たゞ顔を見合せて  
 涙含むばかり、  
 『月に一度づゝは私屹度手紙を上げるから、安雄さんもくださいね。』  
 『うん、上げるとも。』  
 『それから道子さんや他のお友達にも、會つたら宜しくつてね。』  
 『あゝ。』  
 『お墓詣りも忘れないでね。』  
 『あゝ。』  
 二人が限りなく語り合つて居ますと、船頭はさも待ち疲れたと云ふ顔付を  
 して、  
 『さア坊ちゃん如何する、歸るか上るか。』  
 促されて安雄さんは、氣がついて船の真中に突立ちました。何と云ふ突慥



『……………。』  
 安雄さんは黙つて點頭しました。  
 小父さんは行李を肩に乗せて、勢ひ好く船から上られました。其の後か  
 ら私も上りますと、安雄さんは別れともなき風で、  
 『僕もつと送つて行かうか。』  
 と云ひますと、小父さんは何時になく頭から叱つて、  
 『馬鹿を云ふな、お前はこれから學校へ行かんければならんぢやないか。』  
 私も訣別は辛い、何處まで送つて貰つても同じことですから、早く別  
 れて了つた方が優しだと思ひましたので、安雄さんから風呂敷包みを受取  
 つて、  
 『安雄さん達者で居てくださいよ、お父さんやお母さんに世話をやかせな  
 いでね、私も東京へ行つたら……。』





汽車が王子驛に着くまでは、私は淋しい三等室の片隅に、隠れてゐる

(一九) 華族の少女

ひました。  
冬の淋しい澁川町に着きますと、私達は前橋行の馬車に乗り込みました。  
澁川から前橋までの間は、たゞ榛名山の麓を下つて、赤城山の裾野を東  
に、榎木林、麥田、村落の淋しさに包まれて、傾いた小さな軌道を、軋る  
車輛の響きと、時々嘶く馬の聲とを聞くのみでした。  
前橋驛へ着きますと、小父さんはいろ／＼注意して、上野行の列車に乗  
り込ませて下さいました。私は何か知りませんが、涙がホロ／＼零れて  
……。  
知らぬ旅路を、かよわい少女の身で、一人寂しく行くのですもの。



貪な船頭だらうと思つて居るうちに、船頭は用捨も無く、グイ／＼と船を  
漕ぎ始めました。安雄さんは帽子を振つて、  
『姉さん、姉さん。』と幾度も／＼。  
私は心引かれるやうに、街道の凸凹路を、『ハイイ。』と其の度に返事をしな  
がら、此方からも『安雄さん。』と呼びながら、振り返り／＼行きますと  
小父さんはニコ／＼笑ひながら、旅行く人の多い澁川街道を、先に立つて  
行かれました。  
私は思ひに悩む胸を抱えて、今一度と振り返つて見ますと、安雄さんは  
向ふ岸に早や着いて、船から飛び上がるやうに直ぐ、川下へグン／＼降つて、  
行つて、私達の行くのがよく見える處まで来ると、大きな石の上に突立  
つて、帽子を大きく振りました。私は可愛らしい其の心が忘れられず、何  
時までも／＼其の姿を胸に刻み込んで、歩み澁りながら小父さんの後を追





私は嬉しい思ひで、叮嚀に答へました。

『そして何方へ？』

『東京の本郷と申す處まで参ります。』

『初めてゝゐらつしやいますの？』

『えゝ。』

と、私が點頭きますと、此の時まで窓側に立つて居た少女は、その祖母様の耳に口を寄せて、

『田舎から初めてなの？』

『左様ですつて、貴嬢のやうに王子から麴町へ歸るのに、お供が無いと行けないと云ふ人とは違ひますよ。』

と祖母様が、たしなめるやうに優しく仰有ると、少女はさつと顔を赤くして、



るやうに蹲まつて、ひた泣きに泣いて居ました。

曇れる空——その彼方の山々こそ戀しい我が故郷！ と、車窓からそつと眺める私の心は、沿道の何物にも眼が止まりませんでした。

王子驛へ着きますと、私の傍に、品の好い、五十歳餘りとも見ゆる老母と、其の孫娘とも思へる、眉濃き、色白き、十二三の少女とが乗つて來ました。左ほど人目立つほどの服装ではありませんが、何處となく優美なので、私の心は引かされました。

祖母様らしい方は、王子驛を發すると、私の淋しさうな姿を泌々と見入るやうでありましたが、やがて、情籠れる瞳を、じつと私の襟元に注がれました。

『失禮ですが貴嬢は何方からお乗り遊ばしたの？』

『前橋からでございます。』



『私、一人で来られてよ。』  
『でも其の時にになると祖母様と呼ぶのでせう。』

『知らないわ。』

少女はまたも窓に寄りましたが、じつと瞳を私の上に投げて居ました。私は故郷のお墓の下に眠つて居る祖母様のことが、此の時頻りに頭腦へ

浮んで来まして、此の愛らしい少女が、羨ましくてなりませんでした。汽車が田端驛へ着いた時、その祖母様は思ひ出したやうに私に向ひま

て、  
『東京へは御勉強に行らしやるのですか、それとも……。』

と、氣の毒さうな瞳を輝かせて、云ひ淀みました。私は何處の人とも知れないこの祖母様や少女が、何となく懐しくつてな

りませんので、大略身の上話をして、東京の本郷の親類先が、看護婦を營んで居る、其處へ行くのだと云ふことを語りますと、二人は汽車に揺られながら、熱心に聞いて居ましたが、聞き終ると唖と息を吐かれました。祖母様は少女を膝の側に引寄せて、

『貴嬢お聞きになりましたか、此のお娘さんのお話を……。貴嬢などは幸福ですよ、お父様は無くとも、祖父様も祖母様もお母様も居らつしやるでせう、だから今日ばかりでなく、何時も汽車は三等で澤山、ね、分つたでせう。』

『え、分つたわ。』

と、少女は大きい可愛らしい瞳一杯に白露を宿らせて、深く同情したらしく、私の側へ寄つて来まして、

『貴嬢お淋しいでせう、私はお父様お一人だけ居らつしやらないのだけれど、淋しくつて仕様が無いのよ。』





て、始終ニコ／＼と微笑んで居られました。  
 少女は續いて自分の家のことを私に話して聞かせました。屋敷は麴町、身分は華族らしい、祖母様と祖父様とは、故あつて王子の別邸に居られるので、それで少女は學校の暇々に、其處へ遊びに行くのだとのこと。  
 私はそれを聞いて、華族のお嬢さんでさへ、お供も連れず、祖母様と一處に、羞らう様子もなく三等室に乗つてゐるのを見て、私のやうな親の名も知らない貧乏人の娘は、どんなに苦勞したつて、どんなに働いても可いと思ひました。  
 少女は一寸考ふる体でしたが、私の手を握つて、  
 『では屹度よ、名は何と仰有るの？』  
 『角田優梨と申します。』  
 少女は祖母様の方を一寸振り返つて、



あ、何と云ふ優しい少女でせう、私は急に哀しくなつて、返事が出来ませんでした。  
 『看護婦にお成りなさるんですつて？』  
 『はう。』  
 『ぢやアね。』と、少女は少し聲を密めて、  
 『私の祖母様ね、もうお老人でせう、だから何時御病氣にならんとも限らんでせう、其の時は私、平常可愛がつていだゞ御恩返しに、一生懸命に看護するわ、でも私一人では心細いから、其の時は貴嬢来て頂戴ね。』  
 私がもう看護婦で、もあるやうに少女が云ひますので、ハツと當惑しましたが、思ひ切つて、  
 『貴嬢が呼んでさへくだされば、屹度参ります』  
 と誓ひました。祖母様は二人の話を、聞かぬ風をして聞いて居らつしやつ





上野は私の小さい胸で想像したよりは、もつとく廣く大きく賑やかな停車場でした。私はそれに驚かされて、擦れ合ふ人々を避けて居ますと、少女は屋敷から迎ひに来て居つた俣夫を招いて、私の事を話して、確實なる俣夫を依頼して来るやうにと吩咐けました。

俣夫が畏つて彼方に去ると、もうお俣に召された祖母様を待たせて置いて、少女は私に小形の美しい名刺をくださいました。そして云ひ添えて、『麴町の屋敷はいけないの……だから私が王子に居る時入らつしやいなよ。』

『有難うございます。』

と、私は名刺を緊と握つたまゝ、厚くお禮を述べました。私は何となく此處でお別れするのが心淋しく、胸を痛めて居りますと、先刻の俣夫は老ひたる一人の正直さうな俣屋を連れて來ました。



『祖母様、春木町の須田看護婦會つて、深森先生のぢやなくつて？』

『祖母様も左様だらうと思つて居ますの。』

返事を聞くと、嬉しさうな顔を私に向けて、

『貴嬢、行く道が分つてゝ？』

私は口の中で『否』と答へて、羞らつて居ますと、

『では私、教へて上げてよ。』

と云ふ時、汽車は上野驛の構内へ入つて、夕暮の室に汽笛の音が強く響き亘りました。

(三〇) 急なお使者

私は少女と其の祖母様の後に従いて、雪崩のやうに構内を出る人々に押されながら、改札口を出ました。





少女が美しく輝きある車上の人となると、私等を黙つて見て居られた祖母様は、温い笑顔で、私に別れを告げられました。

『一生懸命御勉強なさるんですよ。』

『はう。』

と、其の御親切を謝して居ると、少女は別れともなげに、『では貴嬢……。』と云ひますので、私も俤に犇と寄つて、

『いろ／＼有難うございました。』

と御挨拶すると、俤は静かに曳き出されました。

私は何故か名残りが惜まれて、涙含んだまゝ、じつと其の後を見送つて居ますと、停車場の賑かな角で、少女は颯とリボンを夕風に翻へさせて振り返りました。私は嬉しく叮嚀にお辭儀をすると、少女も遙に會釋して向き直ると、美しい俤は遠く／＼走り去つて了ひました。



少女が頼みくれたる老ひたる俤夫は、親切に私を俤に乗せて、やがて本郷に向つて曳き出しましたが、私は賑かなる春の都も夢の如く、たゞ優しき美しき少女のことのみ胸に繰返へされて、通り一遍の人達とは如何しても思へず、何か私に因縁のある方々のやうに考えられてなりませんでした。ほんに東京は賑かな處、何處を見ても人ばかり、その中を私を乗せた俤は縦横に馳せ抜けて、やがて春木町の『須田看護婦會』と淡く輝く軒燈の前止まりました。

俤から下りて、其の門を潜つた時、私の胸は限りなく浪立ちました。静かに私が訪ふ聲を聞くと、御主人は親ら襖を開けて、優しく迎えてくださいました。

初対面の挨拶が終ると、御主人は繁々と私を眺めて、いろ／＼と故郷のことを聞かれました。それから家に居合はす看護婦の方々に紹介されて、



いよいよ私は今夜から此の家に起居することになりました。御主人の須田登美子様は、四十年配の優しさうな方、若い看護婦の方々は、皆な先生々と云つて居ます。私も明日から先生と呼ばうと心に定めました。

其の夜私は心寂しく、温かに夢を結ぶことが出来ませんでした。

翌日私は、厚いお世話を受けた小母さんと小父さんと、別に一通安雄さんへ宛て、それから道子さんと、長々しい手紙を出しました。繰返し「お禮を述べて、終尾に『東京は何が何だか私には些とも分りません。』と書き添えました。

實際東京の市街は、昨夕來る道々で見ただけでは、私の小さい胸の想像に曇り切れないのでした。たゞもう賑かなので呆氣にとられて……。

それから一年——翌春までは、別に書き記すほどのこともありませんで

した。優しい先生と、同情あるお弟子の看護婦の皆さんとに教へられて、仕事の暇々に看護學の一斑を修めて、何うやら病床日記位は、覺束無いながら書き記せるやうになりました。

故郷との音信は絶えず遣り取りして居ました。一番私を喜ばせるのは安雄さんと道子さんとの手紙で、これが爲めに淋しき夕暮など、屢々慰められて居りました。

停車場でお世話になつた高木家の令嬢琴子様からは、一二度繪葉書を書くださいました。私も直ぐお返事を差上げて置きましたが、それから半年ほど経ちますが、更にお音信がありませんでした。私は心にかゝらないではありませんでした。春もや、景色整つて、咲き匂ひたる梅の花の散る頃は、私は不圖琴子様のことが思ひ出されて居ますと、夕暮、高木家から急なお使者！





お使者の口上に依ると、琴子様は急病で王子の別邸にお臥つて居らつしやるから、直ぐと来ていたゞきたいとある。

私は驚いて、時を遷さず先生とお二人で伺ふことにしました。琴子様の事は先生にも疾にお話してあつたから、よく知つてゐらつしやいましたので、先生は支度が出来ると、私をお呼びになつて、

『如何いふ御病氣が行つて見た上でなければ分らないが、私等の看護の力で御全快おさせ申す覺悟が無いと駄目ですよ』

『は。』  
と、私は明瞭答へました。

これは私が見習看護婦として初めての出張でした。其の初陣に懐かしい琴子様の看護とは、まるで夢を見るやうな心地でしたが、萬一、私の誠心を籠めた介抱で、御快復なさらない時は、私は琴子様の後を追はうとま



で堅い決心をしました。

(三二) 見習看護婦

高木家の別邸は、王子稻荷の恰度真上で、雑木林に圍まれた、それはく廣々とした、嚴めしい構えでした。

私は先生の後に従いて、お取次と一所に、森としたお玄關から、幾つかのお座敷の横やら前やらを通り過ぎて、南に向つた琴子様の御病室へ伺ひました。まだ咲かぬ蕾の花の琴子様は、痛々しく寢れて病床の上に臥つて、傍には祖母様が、侍女と共に心配さうにして居られる。

先生が祖母様に御挨拶をなすつて居る間に、私はそつと琴子様のお傍に寄つて、お顔を覗くと、琴子様は、もう私等の伺ふのを待ち切つて居られたやうに、寂しい笑を浮めて、静にお手をお出しなさいました。



私は思はず涙に眩まされて、堪えられず胸が迫つて来るのをやつと耐えて、お手を緊と握つて、これが切めてもの御挨拶。

琴子様は、一年前に停車場でお別れした時の元氣は無く、私に手を握らせたまゝ、眼を閉ぢると、涙が白露の玉と結ばれました。

私はそれを柔かに拭いて上げました。先生は立つて支度にかゝる、其の間、私は静に祖母様に御挨拶を申し上げ、去年東京へ来た時の御禮を述べ添えますと、祖母様は私が伺つたのを、大きな力でも得たかのやうに喜ばれて、

『あの時の約束では、私が貴嬢達に介抱していただく筈でしたのに、斯様なことになつて了ひました。屋敷には出入りの看護婦もあるのですが、此方に居ることでもあるし、それに琴子が貴嬢を是非と云ふので、お迎ひを上げました。よく早く来てくださつた。』

『まア左様でございますか、私何だか夢のやうで……。生命にかけてもお嬢様の御全快遊ばしますやう、屹度御介抱申し上げます。』

と、明瞭お答へをすると、祖母様は限りなくお喜びなされて、

『どうぞ、頼みますよ。』

其處へ祖父様だと云ふ、氣高い、白いお髯のある方が見えられました。祖母様が私等のことをお話すると、

『む、左様か、何分頼みますぞ。』

と、鷹揚に仰有つて、琴子様のお額に静に手を當て、御覽になつて、大分に熱がある、困つたものだと言ふお顔付をなさいました。

主治醫の深森博士は別室に來られて居つて、看護婦が見えたと聞くと、直ぐと先生をお呼びなさいました。大方琴子様の御病症のことや、看護に就ての注意などお話をさるのでありませう。



私が看護服に着替えて更に坐到就くと、祖母様は琴子様の此様な病氣にかゝつたことに就て、詳しいお話をしなさいました。  
 一昨日のこと、琴子様は例の通り元氣好く麴町の屋敷から來られて、お晝御飯を召上つてからお庭に遊んで居られた時、如何した機みかお轉びなすつた。それが原因で、其の晩から熱が出て、そのまゝドツと病の床にお就きなされたのだとのこと。

お話のうちに先生は戻つて來られた。

まだ病症は分らないが、ひよつとすると肺炎を起すかも知れない。幸ひに肺炎を起さないまでも、心臟を犯されるかも知れないから、今夜と明日を最も注意しなければならぬ。安らかに眠つて、熱さへ激しく出なかつたら、もう此方のものと思つて安心しても可いと、深森博士が仰つたと先生が小聲で私に注意してくださいました。

安らかにお寝かし申すこと——これが私の其の夜の勤務でした。  
 やがて淡く燈火が點いて、夜の世界となりました。  
 静に——闇の幕が下されると、王子一帯の高臺は、眠るが如く更けて行きました。何處の製造所か、汽笛が鳴りました。  
 寂しさは刻々に襲つて來ました。私は先生と共に琴子様の枕邊近く坐を占めて居ますと、今度は汽車の笛が鳴つて、列車は直ぐ下を走つて行き過ぎました。

遠い田舎から花の都へ、喜びの思ひに満ちた旅人を乗せた列車でありませう——琴子様はそつと眼を見開いて、

『彼音……汽車？』

『左様でございます。』

と、静に私が答へると、暫くして琴子様は、





『彼車で入らつしやつたのね。』

『え、。』

其のまゝ、琴子様はお眠りなされた。

私は先生と顔を見合はせて、其の折のことをまぎ／＼と思ひ浮かめまし  
た。

夜は静に更けて行く……。午前三時。

琴子様は蠢めく如くお頭をお上げなすつて、私を呼んで、

『優梨子さん……。右の足が痛い。』

『右の御足でゐらつしやいますか？』

静に洋燈を引寄せて、仰有るまゝに右の足を改めて見ますと、踵の處が赤  
く熱を持つて膨れて居ました。

先生は直ぐと用意してあつた氷嚢に氷を入れて、緊と括つて、其の膨れ

た處を冷すと共に、静に柔かに痛みを揉み解きにかゝりました。

斯様して私等は、其の第一夜をお伽して過しました。

(三三) 可愛い孫娘

朝の風が冷たく軒端を訪れ初めた頃、琴子様は俄に熱が高まつて、それ  
と共に患部の痛みに、見るも痛はしいほどお悩みなされた。

私と先生とは、琴子様の仰有るまゝに、彼處此處と揉み軟げて居る處へ  
主治醫の深森博士が見えられました、そして叮嚀に診察をして仰有るには  
それは轉んで撲つた處が化膿するのであらう、化膿したならば或は意外の  
好結果を得るかも知れぬと喜ばれたが、隙間も無く額に汗を見せて、琴子  
様のお悩みなさる様は、看護婦でありながら、私は、ハラ／＼思つて途方  
に暮れてました。







其の日から四日間と云ふものは、私等は病室に詰めつきりで、心と身とが續く限り、深く看護に意を注がしました。

五日目の夕暮、琴子様は痛みに疲れて、スヤ／＼と御寝なつた隙に、私は燦めく星の懐かしく、そゞろ心を動かされて、庭下駄のまゝ、お庭の彼方此方と逍遙しました。將に散らんとする老梅の、雪とも見ゆる木の下に立つて、其の香に酔つて恍惚として居りますと、木森の彼方から御鈴の音が響いて來た。

私は全然忘れて居た！

此の高臺の麓にはお稻荷様のお祠があると聞いて居た、私は動く心にひかされて、裏門を後に、徑道を下つて行きました。

稻荷の社殿は未だ蘭けぬ春の木立深く、四境は神寂びて、夕闇に閃めく金碧の光りが眼を射りました。苔蒸せる石段を昇つて、私は靜に拜殿に額



づいて、琴子様の御病氣御全快を衷心から祈りました。

看護婦が患者の病氣の全快を神様に祈るなんて、人が聞いたら笑ふでせうが、私は琴子様のことならば、自分の身が如何なつても厭はぬ、如何あつても快くして上げなくてはと覺悟をして居るのです。

祈り終つて起ち上りますと、何時の間に来られたか背後に琴子様の祖母様が立つて居られて、私が御鈴をガラ／＼と鳴らして振り返る時、祖母様は歩み寄られて、

『貴嬢もお詣りをしてくださいつたの？』

『はう。』

と、私は微に答へました。

『まわ本當に有難う。貴嬢が熱心に看護してくださるので、どんなに私は心丈夫か知れませんか。』





『否もう行届きませんので……そればつかりを心配して居ります。』

『どうしまして……』

と云ひながら、祖母様は様子ありげに四邊を見廻されたが、二人の他には誰も居らぬのに安心なされて、拜殿近くの石の塵埃を拂つて、それに腰を下されました。私は仔細は知らぬが、何かお話があるのだと思ひましたから、其の傍に蹲りますと、祖母様は聲を密められて、

『これは一家の祕密で、人は誰も知らないことですが、貴嬢が琴子を親身のやうに介抱してくださるので、他人とは思はれんので、何も彼もお話しますが、實は琴子は、高木家の娘ではないのです。高木家は彼女の母の生家方なので、それで琴子は世話にはなつて居りますが、本當は私達の可愛い孫娘で、大友の家の血統なのです。それで私達は彼女を杖とも柱とも思つて、たゞもう琴子の大きくなるのを樂みに此の世を送つ



て居るのですから、私達老夫婦を助けると思つて、よく看護をしてやつてください。琴子は父親の無い可愛さうな娘なのですから、行末とも親しくしてやつてください、生憎母も旅行中なので、猶更心細からうと思ひますので、それやこれやを思ひますと、悲しくなつて……、何分ともお頼み申しますよ。』

と祖母様は長々と物語られ、ハンカチーフで眼を拭はれました。

『よく分りましてございます。私はまた、お嬢様が御大病なのに、如何してお母様が爲らつしやらないのかと、お怨み申して居りました。左様いふ譯とは存じませず……』

『なにね、一寸門司まで行きましたので、電報を打ちましたから、もう程無く参るでせう。何卒、今の事を含んで、琴子を可愛がつてやつてくだ



祖母様は聲を吞まれて仰有いました。

私は世の薄命に泣く者は、私ばかりでも無いと思ふと、御身分が御身分だけに、一層琴子様がお可哀さうになりました。

『祖母様、御安心遊ばしませ、お嬢様の御病氣は私が受合つて……。』

『あゝ、何卒、何分とも……。』

祖母様は泣かれた。私も泣きました。

四邊が急に暗くなりましたので、祖母様と私とは、夕闇を辿つて、出て来た裏門をまた入つて、歸りました。

私は直ぐと病室へ行つて見ますと、今、主治醫の深森博士は先生を相手に刀を取つて、痛々しく化膿した患部を切開しやうとなさる處。

『これさへ切開して了へば此方の有です。何しろ熱が烈しかったので、斯様なる前に心臓を犯されやせんかと、そればかり心配して居りました。』

『えゝ、本當に……幸福でございました。』  
と、先生は御疲勞のうちにも隠しきれぬ喜色を浮べられましたから、私も胸がスーッと開けるやうに嬉しうございました。

(三三) 先生のね伽噺

翌日はお痛みも薄らいだと見えて、琴子様はすや〜とお眠られた。これまでのでやうな蠢きのお聲も無く、世もなげなるお顔色も無く、極めて静に御寝なつたので、私等は蘇生つたやうに、呻と胸を開きました。

よく病床に來られては、琴子様の御容態を御覽になつて、じつと額に手を當て、黙つて考へ込んで居られた祖父様も、其の日は喜ばしさうに、白いお髯を撫でられながら、祖母様を相手に、先生と氣候の模様などのお話を取換されました。斯様なことは初めてなので、私も何がなしに嬉しう





ございました。

先生も矢張り嬉しいと見えて、此の日までは用事の外は言葉もかけられず、琴子様のお側に付きつきり、話一つしてくださらなかつたが、其の日は顔の色も晴れやかに、笑ひを含んで私ともいろく語られました。

琴子様は、其の夜も安らかにお眠りなさいました。

翌朝は空見事に晴れて、春の風の暖かく、自然と人の心も綻びて、何處ともなく暢やかに、長閑な気分になつた頃、琴子様はお眼覚めになつて、じつと私をお見詰め遊ばした。

其の眼の光り輝きには衰えたる色も無く、何處となう生あるを認めた私は、我が身のこともあるやうに嬉しく、思はず犇とお側に寄り添つて、

『御気分は如何でゐらつしやいます？』  
とお尋ねすると、琴子様は、

『好いのよ。』

『それはまあ宜しうございますこと。』

と、お喜びを申し上げますと、

『私、皆な知つて、よ、眞實に貴娘にはお世話になりました。』  
と云つて、先生の方を一寸見られて、

『須田さん、私、お禮を云つてよ。』

『いえ、如何いたしまして、勿體ない。』  
と、先生は仰山に手を振られました。

『あ、左様々々、先生と云ふんでしたつけ、優梨子さんの先生ですもの、ね、優梨子さん。』

私は、黙つて微笑んで居ますと、先生は眞顔で、

『いけません、だから私は優梨さんに、我家では兎も角、先生なんて







顔を拜見しました。

『それではお話いたしますよ。』

瑞西の或る田舎に、リジャと云ふ娘がございました。此の娘は何者にか捨てられましたのを、慈悲深いお婆さんの手に拾ひ上げられて、大切に育てられましたがお婆さんも取る歳には勝てませんで、リジャが十三の春、とうとう死亡なつて了りました。

死亡なる時お婆さんは、リジャを枕元に呼びまして、寶石入の金の指環を出し、「リジャ、これは世に二つと無い寶で、心の曇つた時は寶石も曇り、心の晴れやかな時は寶石も光ります。だから此の寶石を朝夕見て、心を正しくして、どんなことがあつても決して曲つたことをするのではありませんよ。今までは云ひませんでした、實はお前は私の子では無ら、此の指環もお前のもの、これを證據に生みのお父様お母様を尋ねた



云ふのは止して頂戴つて云つてあるんですのに……。お嬢様から先生なぞと仰有られては、顔から火が出るやうでございますよ。優梨さん、困るぢやありませんか。』

『だつて私、始終先生と云つてるので、つい……。』

と、私が言譯をしますと、琴子様は、

『可いことよ、先生と云ふのが眞實ですわ。』

と云つて、大層な御機嫌です。先生はさも困つたと云ふやうな風をして、黙つて下を向いてゐらつしやいましたが、頓て首を擡げて、

『では仕方がありませんから、今日は一つ先生になつて、お嬢様のお慰みに、お伽噺を致しませう。』

『えッお伽噺！ それは嘸面白いでせう。』

私が賛成しますと、お嬢様もお喜びになつて、初めてお笑ひになつたお





ら、よも知れないこともあるまい。」と云つて、其のまゝ息を引取つて了ひました。

リジャは其の寶石入りの指環を握つて泣いて居りましたが、近所の人に勵まされて、やつとお葬式を出しました。後片付が済みますと、リジャはお婆さんに云はれた通り、指環を證據に生みのお父様お母様を尋ねやうと、先づ都に行くことに決心しました。それで近所へ暇乞ひをして出かけたが、何しろ遠い〜都のことですから、途中で少しばかり持つて居た旅費は残らず遣つて了ひました。』

『可哀さうだわねえ。』

と、お嬢様は小聲で仰有つて、じつと聞いてゐらつしやいます、先生は話を續けて、

『リジャは困りきつて、お腹は餓く、足は疲れる、宿る處は無いと云ふ有



様で、或る淋しい村道をトボ〜と辿つて行きますと、思ひがけなく路傍にお金の澤山入つて革財布が落ちて居ました。

其の時リジャは、これさへあれば、御飯も喰べられ、ば、俵に乗ることも出来ると思ひましたが、不圖お婆さんの遺言を思ひ出して、直ぐと指環の寶石を見ますと、寶石は悉皆曇つて居りました。あゝ恐ろしい、私は飛んでもないことを思つたと、疲れた足を曳き摺るやうにして、落主を尋ねて渡しました。

すると如何でせう。其の落主と云ふのは名高い悪者で、リジャを見ますと、何か心に點頭きまして、お禮をしたいからと云つて、無理に奥の部屋へ押込め、外からピンと錠を掛けて了ひました。

リジャは餘りのことに驚いて、泣いて居りますと、頓て悪者は美しい衣服を抱へて來まして、「さア泣いて居る處でない、早く之を着ろ、私はこ



れからお前を王様のお城へ連れて行つて、お姫様と云つて欺して、褒美の金にありつくのだ」と云ひながら、荒々しく着て居る衣服を脱がせにかゝりますので、そればかりは免してくださいと頼みましたけれども悪者は諾いてくれません。』

『まア憎らしい……。』

と、お嬢様は身體の痛みも忘れて、緊と私の手をお握りになりました。先生は話に興が乗つて、手真似までなされて、

『リジャは其の時また指環のことを思ひ出しましたから、そつと、悪者に知れないやうに見ますと、寶石は少しも曇つて居りませんので、そんなら行つても悪いことはないのだらうと、不承々に承知しました。悪者は喜んで、リジャに美しい衣服を着せ、自分は優しさうな従者に化けて、馬車で王様のお城へ乗込みました。』

王様は王女が小さい時行方知れずにあつて了つたので、手の届く限り探ししましたけれど、少しも消息が分りませんので、毎日くよくよなすつた居る處へ、王女が還つて來たと云ふものですから、大喜びで王妃と一緒に會ひになることになりました。

従者に化けた悪者は、こゝどと思つて、一生懸命にうまく王様を云ひくめるめましたから、王様も王妃も、「それではこれが姫か」と云つて、田舎娘のリジャを抱きかゝえてお喜びになりました。

リジャは其の罪の恐ろしさに慄えまして、「私はお姫様ではありません、田舎の賤しい娘です」と、眞實のことを申し上げますと、王様は驚いて直ぐと従者の悪者を縛り上げて了ひました。

そしてリジャの正直なのに感心して、猶ほ詳しくお尋ねになりましたから、リジャは今までのことを残らずお話ししますと、王様は不審さうな顔





をなされて、「では其の指環を見せよ、」と仰せられますから、「ハイ」と云つて直ぐに懷中から出して御覽に入れますと、王様はじつと眺めて居られました。頓て王妃の手にお渡しになり、「矢張り其方は姫に違ひない。此の指環は此の城の寶物、これを持つて居るからには姫に違ひない、」と仰有つて、田舎娘のリジヤは、一足飛びに王女になつて、リジヤ姫と云ふことになりました。

リジヤは夢に夢見る心地で、眞實のお父様お母様に取すがつて泣きました。悪者は悪いには違ひありませんが、罪は別段お咎めなく、篤く諭されましたので、それからは善い人になりましたと云ふ、これは歐洲のお伽噺でございます。』

と語り終ると先生は直ぐ、琴子様の體温を計られました。

『リジヤは可愛さうね、でも王女になつて、お父様やお母様にお會ひで好



』と云つて、

琴子様は疲れた御様子もなく、緊と握つた私の手を振るやうになさいましたが、不圖、私の指環にお氣付きになつて、

『あら拜見、リジヤの指環のやうだね。』

『いえ、そんな結構の品ではございません。』

私は先生のお話が、泌々と身につまされた處でしたから、琴子様に指環のことを云はれて、一層、氣が妙になりました。

『何でも好いわ、姉妹になるしに、私のと交換してよ。』

私が黙つて、爲すまゝに任して居りますと、琴子様は何時の間にか抜き取られて、御自分の寒れきつた指に箝め、じつと見て居らつしやいました。が、『おや?』と仰有つて、不審さうなお顔をして居らつしやいます。

『何うかなすつて?』





と、私が覗き込む其の顔を、琴子様はじつと御覧になつて、

「貴娘、角田さんで御姓ね。」

「え、。」

「此の指環には君島つてあるわ。」

「え、父の記念ですの。」

「お父様のお記念……?! それでは取換えられないのね。」

と云はれましたが、それでもまだお嬢様はお放し遊ばさず、懐しさうに握つたまゝ、私を見詰めて居らつしやいます。

「優梨子さん、私、貴娘が如何しても姉さんのやうに思はれて仕方が無いの……。ですから姉さんになつて頂戴な、ね。」

「勿體ない姉さんになつて、始終お嬢様のお側に居ることが出来ずればお小間使ひでも嬉しうございますわ。」

「いえ、姉さんが可いの。」

と、琴子様は熱心に仰有つて、

「貴嬢が姉さんになつてくださらないうちは、私、これをお返ししなくつてよ。」

「だつてお嬢様……。」

「何と仰有つても駄目よ、もうちやんと決めて了つてよ。」

お嬢様は指環を握つたまゝ、手をお蒲團の中へ引込めておしまひになりました。

私は困つて、何と御返事をして可いか分りませんので、たゞ黙つて下を向いて居りますと、先生は、私の加勢もしてくださらず、お椽に出て微笑んで居るばかり。意地の悪い!

其處へ祖母様が見えられました。琴子様は祖母様の姿を見ると、直ぐに、







『祖母様、私、優梨子さんと姉妹になつたの、そして之れ、其の證に戴いたの。』

琴子様は、わざと私の顔を見て、微笑みながら指環を祖母様のお手にお渡しなさいました。祖母様は琴子様の機嫌の好いのを何よりとお思ひなさる御様子がありくと見えなりました。顔にニコニコと笑ひの波を寄せられながら指環を一目御覽になると、

『おや！ これは君島のだね。』

と、驚きの眼を見張られなりました。何にも御存知無い琴子様は、

『え、君島と彫つてあるの、立派な指環ね。』

と仰有つたが、祖母様はそれには御返事もなされず、何物か強くお胸に響いたなうな御様子でしたが、それを押し鎮めるやうにして、私にお向ひなされて、

『これは何方でお求めですか？』

『亡父の記念だと申して、可愛がられた故郷の祖母様から戴きましたのでございませう。』

『えッお父様の記念?!』

祖母様は吐くやうに、口の中で幾度かお父様の記念々と繰返しながら、じつと私を見詰められました。指環を持つたま、何にも仰有らずにお奥へ行つておしまひなされた。

(二四) めぐりあひ

其の御様子が餘り變でしたので、如何なされたのだらうと、不審に思つて居りますと、やがて女中のお絹さんが来て、祖父様がお呼びですと云ふついでお部屋などへお呼立てのことはないに、何の御用だらう？ と、私





は胸をおどらせて行つて見ますと、祖父様は私の指環を緊と握つて、祖母様と頻りに何か打案じて居らつしやる御様子。

『御用でございませうか。』

と、私が闕際に手をついて伺ひますと、祖父様は、

『もつと此方へお寄り、遠慮しないで……。優梨子さん、妙な事を聞くとやうだが、貴嬢の田舎のことを一寸聞かしてくださらんか。』

と仰有ると、祖母様も、

『貴嬢の小さい時のことですよ、私達に解るやうに、能く話してくださいませ。』

と口添えなされて、私の顔を御覽なされては涙含まれる。何のことだか薩張り私には譯が解りません。

けれども尋ねらるゝまゝに、私は改めて可愛がつて貰つた叔母様の悲し

い最後のことや、叔父さんから聞たことや何や彼や、落ちもなくお話すると、祖父様は眼を閉ぢたまゝ聞いて居られたが、何時か涙を浮められて、

『では宮田村と云ふ處を尋ねれば、其の時のことが解らうの？』

『は、それは解りますでござります。』

『む。』

祖父様は點頭かれた。祖母様はそつと涙をお拭きなされました。私も思はず悲しくなつて啜り上げました。

『お泣きでな。』

と、御自分でも聲を潤ませて仰有つて、

『屹度祖父様左様ですよ、左様に違ひありませんよ。』

『まア待つて居れ、よく調べて見た上でなければ……。』

私は何の事か解りませんが、もしや彼の指環に關係したことはあるま



いかと思ふと、空恐ろしく、何故要りもしない指環なんぞ嵌めて居たのだらうと、我身の足らぬ行爲を悔ひて、そつとお部屋を退り出て、お庭の隅にイんで、獨り胸を痛めました。

やがて午後になりますと、麴町のお屋敷から、琴子様のお母様がお越しになりました。今朝旅行先からお歸りになつて、直ぐと此方へ來られたのだと云ふこと、けれどまだ病室へはお見えにならないので、琴子様は少々御機嫌が悪い。私はそれをいろ／＼お慰め申して居ますと、祖母様が入らつしつて、

『優梨子さん一寸……。』

と、入口の處で私をお呼びになつて、其のまゝ又た祖父様のお部屋へ。私はまた屹度指環のことであらうと思つて、不安で／＼堪りませんでしたが躊躇して居る譯にもいきませんから、軽く琴子様に、『直ぐ來ますよ。』

とお断りを云つて置いて、祖父様のお部屋へ行つて見ますと、氣高い丸鬚に結はれた琴子様のお母様は、何事か祖父様に云ひ慰められて居られる御様子。

私は遠慮して、お部屋の隅の方へ悄然座りました。其の私の姿を琴子様のお母様は御覽になると、轉ぶやうに走り寄つて、

『祖父様左様でございます。ゆみ子です。』

私を犇と抱えて、顔を繁々と見まもつて居らつしやいましたが、やがて斯様仰有つて、身を顫はせてお泣きなされた。

何れ深い仔細があるのでせうが、私には薩張譯が解りません。たゞと、其のお美しい襟元を見詰めて居りますと、

『私は貴嬢の母ですよ。』

と絞るやうな聲で仰有る。



『えッ！ お母様！』  
私は呆氣に取られて了ひました。

『母ですよ〜。ゆみ子、よく大きくなつておくれたね。』  
と、お母様は私を抱き締めてお泣きなされる。祖父様も泣かれた。祖母様も泣かれた。

『斯様云つたばかりでは解るまいが、君島と云ふのは私の生家の姓で、華族になつてから高木となつたのです。彼の君島と彫つてある彼の指環は、私からお父様に上げたのです。解りましたらう〜。』  
貴嬢が四歳の暮でした。或る事情の爲めに遠い北の國で、お父様とお別れしなければならなくなり、私は琴子を抱き、お父様は貴嬢を連れて：  
。あ、堪忍してください、皆な私が悪かつたのです。』  
夢に夢見る心地とは、私が此の事を聞いた時のことでせう。祖母様は傍か

ら、

『ゆみ子さん解つたでせう、ですから貴嬢のお父様は、私等の息子の大友光雄、不思議な縁で逢ふことが出来ましたのう。』

『あ、私、何と申し上げたらいゝのでせう。』  
私は堪えられず、わツと其處に泣き伏しました。

『堪忍してください。』  
と、お母様も、私の上に覆ひ重なさつてまた泣かれました。  
祖父様は男だけに、私達のやうに取亂しては泣かれず、眼をしばたゝきながら、お父様が放蕩であつたことから、お母様が生家へ引取られたことの大略をお語りなされた。

。あ、私は偶然にも、お母様に會うことが出来ました。祖父様にも、祖母様にも、殊に愛らしい妹さへあつたとは。夢——全く夢です。



故郷の祖母様が生きて居て、これをお聞きなすつたら、どんなに喜んでくだすつたらうと、それを思ふと又た別の涙が湧いて出ました。

(二五) 姉と妹

祖母様と、お母様と私とは、涙を拭いて連れ立つて病室へ入りました。祖父様も後から入らつしやいました。

お母様は懐かしさうな琴子様の枕元にお座りなさるゝと、待ちこがれて居た琴子様は、來てゐながら早くお顔を見せてくださらなかつた怨みの數々も忘れて、お手に犇とお縋りなさいました。

『お母様、私ね、最早癒つたのよ。皆さんのお蔭で……。』

『それは結構でしたね、お母様もね、急いでは歸つて來たのですが、何しろ三百里近い道程でせう。堪忍してくださいよ。嘸、心細かつたでせうね。』

うね。』

『否、お母様、少とも心細かアありませんでしたよ。祖父様も居らつしやるでせう、祖母様も居らいしやるでせう。それに優梨子さんや須田先生が優しくしてくださいましたから、最早此様に快くなつたの。』

『まア左様、皆さんに好くしていたゝいて貴嬢は幸福ね……。琴子さん、お母様は貴嬢に喜んで貰ふことがありますよ。』

と仰有つて、お母様は私と祖母様のお顔を御覽になりました。

『何？ お母様。』

『貴嬢に姉様などは無いと云つたのは、あれは嘘ですよ。實は姉様が一入あるのです。けれども事情があつて、其の姉様はお父様と一所に遠い土地へお出でなされてね、旅先でお父様は姉さまを残してお亡なりなさいました。』



お母様のお聲は曇つて能く聞き取れません。先生は側に居て、不思議さうにお母様のお顔をのぞく眺めながら、耳朶を傾けて居られます。

『其の後行衛が少しも解りませんので、いろ／＼心當りを尋ねて居りましたが、今日漸く知れました。』

『眞實？ お母様！』

琴子様は大きな聲で仰有つて、飛び起きやうとなさいましたが、御足が痛むと見えて、顔を皺めて、またお臥りなさいました。

『何處に居らつしやるの？ 私の姉様は。』

『それはね、優梨子さんなのです！』

『えッ?! 優梨子さん—— 優梨子さんが私の姉さま?!』

『琴子さんッ。』

私は堪らず琴子様の枕元に泣き伏しました。

『優梨子さんが姉さま、優梨子さんが私の姉さま。』  
と仰有りながら、琴子様は私の背に、瘦せた細い白い腕を投げかけて、  
々と泣かれました。

『琴子さん、もうお泣きでない、お前の大好きな優梨子さんが、眞實の姉  
さまなのですよ、嬉しいでせう、さアもうお黙りなさい。』

と云ふ祖母様も眼にも、涙の露が光つて見えました。

先生は傍で聞いて居て、此の不思議な廻り會ひに驚いて居られますと、  
祖父様は先生に、指環が證據になつたことから、美津子が現在の母で、ゆ  
み子は大友家の孫娘であることまで、残らず仔細をお話なされて、これま  
でいろ／＼お世話になつたと云ふお禮までお述べなされると、先生は前々か  
らの私の身の上を能く知つて居られるので、泣いて喜んでくださいました。  
私と琴子様とお母様と、三人緊と手を握り合つて、何時までも離れ





ることではないと、温い血を互ひに通はせて居ますと、祖父様は、晴れやかなお聲でもつて、

『目出度い〜、こんな目出度いことはない！』

『光雄が居りましたら如何なにか……』

と祖母様が思ひ込んだやうに仰有る、祖父様は遮つて、

『いや、彼兒は死んで幸福だつた。然し意外な死方をし居つたな、不憫な奴ぢや……』

眼をしばた、かれると、一座は濕つて、暫時言葉がありませんでした。

私は此の日、故郷の安雄さんの處へ向け、長い〜手紙を書いて、角田と署名する處を大友として出しました。

これで私は、何だか重荷が下りて、新しい世界に生れ出たやうな思ひが

しました。けれどもまだ。琴子様の御足の癒らないうちは、私の責任は濟まない。殊に懐しい妹であつて見れば、猶のこと早く快くしてやらなければ……と私は心に覺悟しました。

三日ばかり経つと、安雄さんから返事が來ました。私の手紙を見て、お父さんもお母さんも自分も吃驚して喜んだと云ふことが詳しく書いてあつて、終りに、彼の手紙を、優梨子姉さんのお父様と祖母様のお墓の前へ持つて行つて讀んだと記してありました。私はまた泣きました。

(二六) 美事な櫻花

のどかに花霞の鬢鬚いて、赤城嶺の麓、一帶の春の村落が豊かに描き出されて居ます、利根川の水も温かさう——津久田村の渡場から降り立つ一群の都人がありました。

169

168



それは誰でもありません、斯く云ふ私等の一行なのです。  
 私は、琴子様の御病氣が癒ると同時に、須田看護婦會から高木家の別邸に引取られて、大友家の人となりました。一時は浮世のつれなさに、身も世もないまでに泣いた私が、生みのお母様のお側、眞實の祖父様祖母様のお側で、安らかに其の日を送ることが出来るやうになつてからは、嬉しくつて、何がなしにたゞ嬉しく、私でありながら私でないやうに思へる時などもあつて、妹の琴子様と、毎日を楽しく暮して居るのです。  
 此の喜びを、亡くなられたお父様や、可愛がつてくだすつた祖母様のお墓の前で申し上げたく、安雄さんにも會ひたく、安雄さん許の小父さん小母さんにも喜んでいたゞきたく、一度は是非懐しい利根川添ひの、私の育つた田舎に行つて見たうございませすとお願ひすると、直ぐとお許しが出て祖父様はお母様と、琴子様までお連れなされて、御一所に墓參をすること

になつたのです。  
 私は、去年の春は、見情らしい姿で下つた澁川街道を、今年の春は、心緩かに私の親める人々を案内することが出来るのです。私は衷心から神様に感謝します。路傍の草から遠い山の端の樹木まで、何一つ思ひ出の種とならぬものはありません。船から上ると、私は歩み馴れない妹の手を取つて、砂利道を登りました。  
 祖父様の立派な白のお髯、お母様の美しいお鬘などが、寂しい村道に表はれますと、路傍の茅の屋からは、いろ／＼の顔がいろ／＼のものゝ蔭から、重なり合つて出て、私等の一行を物珍らしげに覗いて居ます。  
 一年前、繁き涙で記して置いた田舎道を、斯様して思ひがけなく、妹の手を取つて、お母様や祖父様を御案内しやうとは、如何考へても夢です。  
 私がいろ／＼の思ひを胸に躍らせて、小母さんの家の方へ行く道の、櫻





其の聲は、確に安雄さんの聲ですから、  
『え、え、左様ですよ。』  
と云ひながら、私は軟い青草の中に駆け入つて、幹の元の處から振り仰いで見ると、大きな枝に安雄さんは馬乗りになつて居ました。  
『あ、矢張り姉さんだつた。』  
と喜びに満ちた安雄さんは、手折つた櫻の枝を青草の上にそつと投げて、スル／＼と猿のやうに下りて來ましたが、幹の處まで來ると足を踏みこらして、ドタリと落ちて尻餅を搗きました。  
『あら危ないッ。』  
と、私は嗅驚して抱え起さうとしますと、安雄さんは脛を打つたと見えて押えながらも猶ほ、  
『あ、姉さんだ。』



の木の下に出ますと、最早路傍にある櫻の老樹は、空を霞めて美しく咲き匂つて居ました。  
『祖父様、此處から行くのです。』  
と、私はだら／＼坂になつた細路を指差しますと、祖父様は咲き亂れた花の空を振り仰いで御覽になつて、  
『ほう美事な櫻花ぢや。』  
『ほんに美しうございますこと。』  
と、お母様もお褒め遊ばしました。  
『私、一枝いたゞきたいわ。』  
と、琴子様までが恍惚となつて見とれて居ると、樹蔭になつた北の方の枝の上から、突然私を呼んだものがあります。  
『姉さん、姉さんだらう。』



と、涙を出して喜んで居ます。私も嬉しいので胸が一杯になつて來ました。妹の琴子様は投げ捨てられた櫻の枝の美しさに、其處に蹲んで、手に花を觸れさして見とれて居ます。

『痛かつたでせう。』

と、私は安雄さんの手を退けて、打つた處を見ると、僅な擦過傷ではありませんが、血が浸み出て居ますから、ハンカチーフをビリ／＼と裂いて、繻帶をしてやりました。

『姉さん有難う。』

と云つて安雄さんは澁い顔をしながら起上りました。祖父様とお母様とは呼びもなさらず、私等の爲すまゝに任せて、それを路から御覽になつて居ます。

『貴君まだ木登りなんかなさるの？』

『うゝん左様ぢやないの、お墓へ捧げやうと思つて……。』

『お墓へ……。』

と云つたが、後の言葉が續きませんでした。私は泣き出したいほど嬉しうございました。思はず安雄さんの手を緊と握つて、

『安雄さん、有難う、堪忍してね。』

『姉さん、僕、毎日々々姉さんを待つて居たよ。』

『左様、私も逢いたかつたわ。』

『今來たの？』

『えゝ、皆様と御一所に……。琴子さん、御紹介申しますわ此の方安雄さん。』

『あゝ安雄さん、まア左様。』

花を見捨て、琴子様は、安雄さんにお向ひなされて、





私等わたくしたちは其處そこから直ぐ、亡父様おとうさまのお墓はかへお参りまゐすることになりました。安雄やすをさんは家うちへ知らせして来ると云つて驅け出しかしました。私は細道ほそみちを彼方あな此方こなたと辿つて案内あんないの役やくを勤めつとました。お墓所はかしよちか近ちかくなると、誰も黙つて了しまつて、言葉ことばを發はつするものがありませぬ、思おもひひに昔むかしの事ことを胸むねに浮うかめて、亡なきお父様とうさまの俤おもかげを偲しのんで居ゐらつしやるのでありませう。

春はるの日は優やさしく此この村里むらさとを照てして居ゐます。お母様達かあさまたちは馴なれない里道さとみちを、歩あるきくさうに私わたくしに續ついて、土橋どばしを渡わたつて左ひだりへ、懐なつかしいお墓所はかしよの前まへへ來きた時ときは、一足毎あしごとに私わたくしの眼めの露つゆは大きおほくなりました。

『此所こゝでございます。』



『私わたくし、琴子ことこ……。貴君あなたのこといろく姉様ねえさまから伺うかつてよ。』

二人ふたりは叮嚀ていねいにお辭儀じぎを取交とりかしました。安雄やすをさんは羞はづかしさうにして、足許あしもとの櫻さくらの枝えだを拾ひろひ上げあげました。

それから私達わたくしたちは路みちへ出でました。そして改あらためて安雄やすをさんを皆様みなさまに御紹介ごせうかい申ますと、祖父様おぢいさまは初はじめて見みた人ひとなのに、とうの昔むかしから知しつてる人ひとかなんどのやうに、無遠慮ぶゑんりよに安雄やすをさんのいいが栗頭くりあたまを撫なで、

『よくゆみ子を大事だいじにしてくれたのう。其その代かり今度こんどは私わしが坊ぼうを大事だいじにして上げあげますぞ。』

と仰おつしや有あつた。お母様かあさまも傍そばから、

『まア可愛かわいい坊ぼうちゃんだこと、私あたし、ゆみ子の母はですよ、大層たいそうゆみ子こがお世せ話わになりましたつてね……。』

と優やさしく仰おつしや有あるのに、安雄やすをさんは返事へんじに困こまつて、じろくくと私わたくしの顔かほを見みました。

(二七) 光 破 る 破 屋





と、私は青葉した忘れ難い記念のある楓の樹に縋つたまゝ、ハンカチーフを噛み締めました。

大友光雄の墓

これは春のお彼岸に、安雄さん許の小母さんに頼んで、建て、置いた墓標——其の前へ来ると、お母様のお膝は崩れました。あ、お母様はどんなにお悲しいでせう！

琴子様は、じつと眼を閉ぢて居らつしやる祖父様に寄りかゝつて、紅い眼をして、涙を呑んで居ます。お母様は、

『貴郎見てやつてください、ゆみ子も琴子も大きくなつて私の手元に居ります。祖父様も祖母様も御達者でございます。』

と云つて、合掌して、深い〜、心を籠めた禮拜を終ると、其處に泣き崩れてお了いなされた。

『ゆみ子が世話になつた祖母様のお墓は何れぢやな？』

と祖父様は尋ねてくださいました。私は嬉しく、

『これでございます。』

と云つて指差す小さい墓石の前に、『お、これか……。』と仰有つて、額突いて、祖父様は私の手から、安雄さんが折つてくれた美事に咲いた櫻の枝を受取つて、手づから捧げてくださつた。

『悴や孫女が、いかにお世話になつて有難いことぢや、今お禮を申し上げますぞ。』

私等は携えて来た香を心ゆくまで懇に手向けて、其の薄らかなる煙にまかれて、悲哀の思ひをやつて居りますと、其處へ安雄さんと小母さんが走りつけました。

僅か一年見ないうちに、小母さんは大層變られた。それでも半纏は新ら





しい、わざ／＼着換えて来たのでせう、私の傍へ駆け寄ると直ぐ、  
『優梨ちゃん、よくまあ、立派になつておくれだねえ。』  
と、手を取つて泣かれました。

『小母さん喜んでください……。祖父様です。お母様です。』

と、私はお二方の袂を握つて御紹介すると、お母様も祖父様も、右左から  
小母さんにいろ／＼と厚く禮を述べられました。

小母さんは前垂れで涙を拭つて、

『否、私にお禮は要りませんが、せめて此のお墓の人達に、優梨ちゃんの  
立派になつた姿を、……見せたくてございます……。』

小母さんの云はるゝ通り、風來人の娘とばかり思つて、育てゝくだされた  
亡き祖母様に、たゞの一目でいゝから、今の私の此の姿をお目にかきたい!!!  
小母さんは泣いて居る。

祖父様も泣かれた。

お母様も泣いた。

琴子様も……。

安雄さんも私も。あゝ私は、今此のお墓の前で、泣いて／＼泣きぬいて、  
涙を皆な出して了つて、この後は決して泣くまい。

斯う思ふと、私は今日初めて大友弓子となつたやうな氣持ちになりました。  
た。

私の名は優梨子ではなくつて、弓子なりました。私を角田の祖母様が拾  
つてくださったつて、『お前の名は?』と問はれた時、『ユミ』と云つたのを、廻  
らぬ舌で發音が十分でなかつた爲に『ユリ』と祖母様の耳には聞えたので  
あらう。それを文學好きの学校の先生が、『優梨』と云ふ字に當筈めたのだ  
さうです。あゝ、祖母様が達者で居らつたら、どんなにか喜んでくださ





るだらうに……。

私は不圖祖母様の御病氣の時のことを思ひ出して、また悲しくなりました。

お母様は、私と琴子様とお傍へ招き寄せられて、『さアもう泣くのでは  
ありません。』と仰有いましたが、御自分では、まだ泣いて居らつしやいま  
す。

『優梨ちゃん、穢ない家だが寄つてくれるでせうね。』

と、小母さんは、お母様達の心を計りかねて、内密事のやうに云ふのを、  
祖父様は早耳に聞きつけられて、

『弓子のお世話になつた家です。私等には由縁の深いお宅ぢやから、是非  
非寄らして貰ひます。』

と、晴れやかに仰有いました。



村の午後の日光は、鎮守の森の眞上に傾いて、此の涙の一幕を鮮かに地  
上に描き出しました。私等は此處を立去るに忍びませんでした。誰も『さ  
ア行きませう。』と云ひ出すものがありませんでした。

安雄さんまでが茫然立つて居ます。

私の思ひ出の記はこれで終つたのです。

たゞ二つ三つ書き足して置きたいのは、叔父と、叔母と、安雄さんのこ  
とです。

叔父夫婦は、私達の墓參を聞くと、一年前とは打つて變つた人のやうに  
歓迎しました。私は黙つて居るのに、祖母様のことを大袈裟に吹聴して、  
優梨子と私等とは親子も同様であると云ひ添えました。祖父様は簡單にお





禮を云つて、叔父夫婦に少なからぬお金を與えました。

道子さんにも會ひました。眞實に嬉しうございました。『貴嬢が東京へお出での時は、私が案内役になるわ。』と堅い約束をして、そして去年の春渡し場で袂を分つた時のやうに、手を握り合つて、其の時のお禮を云つたり、羨まれたりしました。

安雄さんは、私等が佛事を終つて歸京する時に、一所に東京へ出て來ました。其の二日ばかり前のことです。祖父様は小母さん夫婦に、安雄さんを十年ほど預りたいと云ひ出しますと、小父さんは、氣の毒がつたり、手放すのが嫌やだつたりして黙つて居るのを、小母さんが何も彼も一人で呑み込んで、無理に小父さんに承知さしてしまつたのです。

歸京後は、云ふまでもなく私達は王子の高木家の別荘に居るのです。

過日もお庭で琴子様が安雄さんと何やら云ひ合つて居る様子ですから、私はそつと庭下駄の音を忍ばせて、木蔭に身を寄せて聞いて居ますと、とも知らずに二人は、

『……それア私だつてね、姉様が私のことを琴子さんと云ふでせう。ですもの……、安雄さんと呼ぶのですわ。』

『だつて、それは違ひます。僕は書生ぢやありませんか。』

『否、書生ぢやないのよ、私等の弟よ。』

『否、書生です。』

『オア……。ぢやア何故姉様を姉さん〜てお呼びなさるの?』

『それは……。』

と云つたが、安雄さんは後の言葉が出ないで、さも困つたと云ふ風で、頭

